



Title	「アーベントラント」概念の形成及び思想史的変遷と現代ヨーロッパ政治への影響
Author(s)	
Citation	令和7（2025）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書．2026
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104720
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和 7 年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふ 氏	り 名	が ひらやま こうき 平山 皓貴	な 学部 学科	法学部法学科	学年	3 年
アドバイザー教員 氏名		高橋 慶吉	所属	法学研究科		
研究課題名		「アーベントラント」概念の形成及び思想史の変遷と 現代ヨーロッパ政治への影響				
研究成果の概要						

序論

第 1 節 研究の背景：欧州複合危機と「文明」への回帰

21 世紀初頭の欧州政治は、既存の統合プロジェクトの正当性が根底から問われる激動の時代を迎えている。2009 年のユーロ圏債務危機、2015 年の難民危機、2016 年の英国 EU 離脱（Brexit）、そして 2022 年以降のロシアによるウクライナ侵攻への十分でない対応といった一連の事象は、欧州統合の単なる政策的な失敗としてではなく、欧州統合に基づくリベラルな戦後秩序そのものの動揺として欧州市民に受容された。この「複合的危機（Poly-crisis）」の間隙を突く形で台頭したのが、極右／右翼ポピュリズム政党である。

ドイツ連邦共和国においてその潮流を主導するのは、「ドイツのための選択肢（Alternative für Deutschland: 以下、AfD）」である。2013 年に反ユーロを掲げる経済学者の集団として結成された同党は、短期間のうちにそのイデオロギー的基盤を劇的に変容させた。当初の経済自由主義的な欧州批判は後退し、代わって前面に出たのは、移民・難民の流入に対する激しい敵意と、ナショナリズムの昂揚である。

しかし、近年の AfD の言説を詳細に観察すると、彼らの主張が伝統的な「国民国家（Nation State）」の枠組みだけに留まっていない事実直面する。彼らはしばしば「Abendland（西洋／夕べの国）」という、より広範で歴史的な重みを持つ文明論的概念を動員しているのである。2014 年、ドレスデンで発生した社会運動「西洋のイスラーム化に反対する愛国的欧州人（PEGIDA : Patriotische Europäer gegen die Islamisierung des Abendlandes）」が掲げたこのスローガンは、AfD の党是へと深く浸透し、彼らは自らを「キリスト教的西洋文明」の守護者として位置づけている。

ここには、現代欧州政治を読み解く上で看過できない重大なパラドックスが存在する。欧州統合史において「Abendland」は、かつて戦後 Adenauer 政権下で「西側結合（Westbindung）」や欧州統合を推進するための合言葉であった。それにもかかわらず、現在の欧州懐疑主義政党である AfD において、この概念は欧州統合深化の結果である「欧州連合（EU）」を拒絶し、敵視するために用いられている。「Abendland＝西洋文明を守る」と叫ぶ勢力が、なぜ「Abendland」＝西洋の政治的達成であるはずの EU を破壊しようとするのか。この一見矛盾する政治現象の背後には、現代ドイツ特有の、極めて戦略的な言説構造が介在しているのである。

第 2 節 問題の所在と先行研究の検討

本研究の核心的課題は、この「Abendland」概念が現代ヨーロッパ政治において果たしている機能の解明にある。この点について、既存の研究蓄積は多岐にわたるが、概念史と思想史、そして現代政治分析の間には明確な断絶（ミッシングリンク）が存在する。

特に概念／思想史と欧州統合史の領域においては、Conze (2005) や板橋 (2016)、Forlenza (2017) らが、20 世紀における Abendland 概念の変遷を詳細に跡付けている。彼らの研究は、ヴァイマル期において反自由主義・反近代の象徴であった同概念が、戦後には「共産主義への防波堤」として再解釈され、ドイツの主権回復と欧州統合への参加を正当化するイデオロギー的架橋として機能した史実を実証した。しかし、これらの研究の多くは 60 年代ないし冷戦期の終焉までを主たる射程としており、21 世紀以降の右翼／極右政党やポピュリズム政党による同概念の「再文脈化（recontextualization）」や、その際に生じている意味の転換までは十分に踏み込んでいない。

一方で、現代ポピュリズム研究の領域においては、Brubaker (2017) が提起した「文明主義（Civilizationism）」の枠組みが重要な示唆を与えている。Brubaker やそれに続く Kaya (2019)、Yilmaz & Morieson (2022) らは、現代の右翼ポピュリズムが、従来のナショナリズムから、キリスト教を信仰対象としてではなく世俗的な文化的遺産（Heritage）として利用する「文明的アイデンティティ政治」「宗教ポピュリズム」へとシフトしていることを指摘した。ヴァイス (2019) もまた、ドイツ新右翼における保守革命の文脈から同様の傾向を論じている。これらの研究は、AfD がいかなる論理で「排外主義」を正当化しているかを説明するには有効である。

しかし、ここで依然として未解明なのは、「文明を守る（排外主義）」という情動的な動機が、いかなる論理的回路を経て「EU を批判し、拒絶する（欧州懐疑主義）」という制度的な批判へと直結しているのか、という点である。先行研究において、「Abendland 概念の歴史性」と「現代の欧州懐疑主義」は、それぞれ独立した文脈で論じられてきた。排外主義的な世界観がいかにして反 EU の論理へと翻訳・接続されているのか、その具体的な主張の構築、すなわち「言説メカニズム（discursive mechanism）」こそが、学術的に解明されるべき空白として残されている。

第 3 節 研究目的とリサーチ・クエスション

以上の問題意識に基づき、本研究は、AfD の綱領および関連文書における「Abendland」概念の言説機能を分析することにより、文明的に基づく「排外主義」がいかにして「欧州懐疑主義」を正当化する論理的基盤となっているかを解明することを目的とする。具体的には、以下の二つのリサーチ・クエスション（RQ）を設定し、段階的に検証を行う。

RQ1：文明的に基づく排外主義の構築 AfD の言説において、「Abendland」概念はどのような他者表象や二項対立を用いて、文明的な排外主義（他者排除の論理）を構築しているのか？

RQ2：欧州懐疑主義への転化された「Abendland」的な排外主義は、どのような言説構造（トpos／メタファー）を通じて、欧州懐疑主義（EU 批判・拒絶の論理）へと転化・接続されているのか？

本研究の成果は、この二つの問いへの回答を通じて、二つの主張を提示する。具体的には AfD が偏狭なナショナリズムや人種主義に基づかない文明的な観点から排外主張を構築していること、すなわち「文明的排外主義

「(Civilizational Exclusionism)」を主張していると理解されるべきであること、さらに AfD の欧州懐疑主義が単なる主権国家の復権や経済的利害に基づくものではなく、「文明的欧州懐疑主義 (Civilizational Euroscepticism)」という新たな類型として理解されるべきであることを提示する。

第 4 節 本研究の意義と本報告書の構成

本研究の学術的・社会的意義は、以下の二点に集約される。第一に、欧州懐疑主義研究に対する新たな視座の提供である。従来、EU への懐疑は「経済的要因 (功利主義)」や「政治的要因 (主権)」から説明されることが主であったが、本研究はそこに「文明的・文化的アイデンティティ」という変数を導入し、ポピュリズム政党の支持調達メカニズムをより深く理解するための枠組みを提供する。第二に、民主主義的価値の変容に対する洞察である。「Abendland」という概念が、かつての「統合のシンボル」から「分断の武器」へと変質した過程を追うことは、現代社会において「自由」や「民主主義」といった普遍的価値がいかに再定義され、政治的に利用されるかという普遍的な問いへの示唆を含むものである。

本報告書の構成は以下の通りである。第 1 章では、Koselleck の概念史と Wodak らの批判的言説分析 (DHA) を統合した分析手法について述べる。第 2 章では、先行研究の参照を通じて Abendland 概念の歴史的変遷及び多義性を概観し、かつての欧州統合親和的な性格を確認する。第 3 章では、現代の PEGIDA および AfD における同概念の文明的な排外主義的側面を分析する。第 4 章では、その文明的な排外主義がいかにして EU 批判へと接続されているか、その論理構造を解明する。最後に結論において、本研究の知見を総括する。

第 1 章 調査設計と分析方法：概念史と批判的言説研究の統合的アプ

チ

本章では、本研究が採用した研究設計および分析枠組みについて記述する。本研究の目的は、AfD の政治的コミュニケーションにおける「Abendland (西洋)」概念の機能変容と、それがいかにして欧州懐疑主義へと接続されているか (Connecting Logic) を解明することにある。この目的を達成するため、本研究では R. Koselleck に代表される「概念史 (Begriffsgeschichte)」の視座と、R. Wodak らが提唱する批判的言説研究 (CDS) の一派である「ディスコースの歴史的アプローチ (DHA: Discourse-Historical Approach)」の手法を統合した定性的分析を採用した。

第 1 節 定量的アプローチの限界と定性的分析の必然性

本研究は、AfD の言説における「Abendland」概念の機能変容と論理構造を解明するため、頻度分析や共起ネットワーク分析といった定量的 (Quantitative) 手法を用いず、定性的 (Qualitative) な詳細分析 (Close Reading) に限定する。この調査設計は、本研究の理論的支柱である Koselleck の概念史および Wodak の DHA の特質に基づき、以下の 3 つの理由によって正当化される。

1. 頻度と重要性の非対称性

Koselleck (2002) が指摘するように、「概念 (Concept)」は単なる語彙とは異なり、その重要性は出現頻度 (frequency) のみでは測定できない。歴史的な転換点において、ある概念が極めて戦略的に、かつ少数回使用されることで、決定的な政治的効果 (パラダイムの転換) をもたらす場合がある。特に「Abendland」のような闘争概念は、多用されることよりも、「どの文脈で、誰に対して、どのような対立軸を構築するために使用されたか」という質的な配置こそが重要である。したがって、単語数を計測する定量的手法では、概念が持つ政治的な「重み」を見落とす危険性がある。

2. 文脈依存性と潜在的意味の解読

DHA は、言語の意味が常に具体的な「文脈 (Context)」に依存して決定されると仮定する (Reisigl & Wodak, 2009, p. 93)。特に右翼ポピュリズムの言説は、Wodak (2021) が「計算された多義性 (Calculated Ambivalence)」と呼ぶ手法を多用し、表面上は穏健な語彙を用いながら、文脈によって排外的なメッセージをコード化して伝達する特徴がある。このような「行間を読む (reading between the lines)」作業や、皮肉、引喩 (allusion)、歴史的参照といった修辭的技法を解明するためには、テキストから文脈を剥ぎ取って数値化する定量的アプローチは不適切であり、DHA に基づく定性的な深層分析が不可欠である。

3. リサーチ・クエスチョンの性質

本研究の2つのリサーチ・クエスチョンは、それぞれ「どのように排外主義が構築されているか」「排外主義がいかにして欧州懐疑主義へと接続されているか」という「論理の構築プロセス」を問うものである。定量的分析が示す統計的データは「何が起きているか (What)」を示すことはできても、「いかなる論理で正当化されているか (How/Why)」という言説上の因果のメカニズムを説明することはできない。右翼／極右政党、ポピュリズム政党による微細な論理のすり替えや再文脈化 (Recontextualization) のプロセスを追跡するためには、定性的アプローチが唯一の妥当な手法となる。したがって、本研究においては、定量的分析はおこなわず、定性的分析にフォーカスしたアプローチをとる。

第2節 分析の視座：概念史 (Begriffsgeschichte)

本研究の分析対象である「Abendland」は、単なる語彙ではなく、歴史的な意味の重層性を背負った「概念」である。Koselleck の理論に基づき、本節では分析の基盤となる概念史的枠組みを提示する。

1. 「単語」から「概念」へ：分析対象の定義

Koselleck は、すべての単語が概念であるわけではないとし、「単語 (word)」と「概念 (concept)」を明確に区別している。彼によれば、単語は文脈によって意味が一義的に定まる可能性があるが、「概念 (Begriff)」とは、歴史的な経験の総体や、現実における政治的・社会的な文脈の多様性が、その一語の中に不可分に凝縮されたものを指す (Koselleck, 2002, p. 85)。概念は常に多義的 (ambiguous) であり、それ自体が歴史的な対立や闘争の舞台となりうる。

したがって、本研究では AfD の文献に現れる用語を単なる「単語」として処理するのではなく、ヨーロッパないしドイツの政治史／社会史における意味の歴史性／重層性を背負った「基本概念」として捉え、その変容を分析した。

2. 指標 (Indicator) かつ要因 (Factor) としての概念

概念史は、単に言葉の意味変化を追うだけの作業ではない。Koselleck によれば、政治的・社会的な概念は、歴史的な状況を反映する「指標 (Indicator)」であると同時に、自ら新しい状況を作り出し、未来に向けた行動を規定する「要因 (Factor)」としての機能を持つ(Koselleck, 2002, p. 86)。

特に本研究が注目するのは、「Abendland」概念が現代ドイツの危機的状況（難民危機、アイデンティティの動揺）を示す指標であると同時に、排外主義的感情を動員し、欧州統合への批判や拒絶という具体的な政治行動を引き起こす「要因」としていかに機能しているかという点である。

3. 時間の地層 (Zeitschichten / Sediments of Time)

本研究では、現代の政治言説における歴史的な概念の機能を分析するために、Koselleck が晩年に体系化した「時間の地層 (Zeitschichten / Sediments of Time)」の視座を導入する。Koselleck によれば、歴史的時間(historical time)は単線的に進行するものではなく、地質学的な地層のように、起源の異なる複数の時間の層が重層的に堆積したものである (Koselleck, 2018, pp. 3-9)。概念の中には異なる時代の意味が地層のように重なり合っており、それらは同時代において「非同時代的なもの (the contemporaneous of the noncontemporaneous)」として共存している (Koselleck, 2004, pp. 255-275)。このモデルにおいて、過去の意味や経験は消え去るのではなく、現在の深層に「堆積物 (sediments)」として残り、特定の政治的状況下で再活性化される。

本研究では、AfD の「Abendland」概念が決して単一の意味を持つものではなく、「中世の宗教的対立」、「近代の国民国家的自意識」、「戦後の欧州統合」「冷戦期の東西対立」そして「現代のグローバル化/EU 化への不安」という異なる速度で変化してきた複数の時間層が、現代の政治空間において「非同時代的なものの同時代性 (the simultaneity of the nonsimultaneous)」として共存し動員されている構造を持つことを念頭に研究を遂行した。

4. 分析のための二つのカテゴリー

「Abendland」概念の構造を解明するため、Koselleck (2004) が提示した以下の二つのカテゴリーを導入した。

- **経験の空間 (Space of Experience) と期待の地平 (Horizon of Expectation) :**

歴史的な時間は、過去の「経験 (現在化された過去)」と、未来への「期待 (現在化された未来)」の緊張関係の中に存在する (Koselleck, 2004, pp. 255-275)。本研究では、AfD がいかにして Abendland という概念を用い、過去の「没落の記憶」や「防衛の歴史」を喚起 (経験の空間) しつつ、同時に「イスラーム化の阻止」や「国民国家的復権」という未来像 (期待の地平) を構築しているかを分析した。

- **非対称的対概念 (Asymmetric Counterconcepts) :**

排外主義的な他者排除の論理を解明するために、「非対称的対概念」の枠組みを用いる。政治的な集団形成においては、自己を普遍的な善 (例: ヘレネス、キリスト教徒) と定義し、他者を否定的なカテゴリー (例: バルバロイ、異教徒) へと一方的に格付けする構造が見られる (Koselleck, 2004, pp. 155-191)。本研究では、「Abendland」概念がいかにしてイスラームや EU を「文明の敵」として非対称的に位置づけ、排除を正当化しているかを検証した。

第 3 節 分析のプラットフォーム: ディスコースの歴史的アプローチ (DHA)

概念史によって特定された歴史的意味が、現代においてどう運用されているかを分析するために、R. Wodak らが体系化したディスコースの歴史的アプローチ (DHA) を採用した。DHA は、「テキスト」を孤立させず、歴史

的・社会的文脈との相互作用を重視する点で、概念史と極めて親和性が高い(Reisigl & Wodak, 2009, pp. 87-93)。

1. DHA の特質

DHA は、批判的言説研究 (CDS) の中でも、特に「歴史的な文脈」を重視する学際的なアプローチである。Reisigl & Wodak (2009) によれば、DHA は問題志向 (problem-oriented) であり、理論と経験的データの絶え間ない往還 (abductive approach) を特徴とする。

2. 文脈 (Context) の 4 レベルモデル

本調査では、DHA が提唱する以下の 4 レベルの文脈モデルに従い、「Abendland」概念の多層的な分析を行う (Reisigl & Wodak, 2009, p. 93)⁽¹⁾。

- **言語内的文脈 (Language-internal context) :**
テキスト内部での「Abendland」と共起する語彙 (例:「キリスト教」「没落」「防衛」) の関係性。
- **テキスト間の文脈 (Intertextual relationship) :**
AfD の綱領が、PEGIDA のスローガンや過去の保守革命の文献やその要素をいかに引用・参照しているか。
- **状況的文脈 (Extralinguistic social variables) :**
難民危機 (2015 年) や欧州議会選挙といった具体的な政治イベントと発言の関係。
- **社会政治的・歴史的な文脈 (Broader sociopolitical and historical context) :**
「Abendland」概念がドイツ史 (ヴァイマル期、アデナウアー期、冷戦期) において担ってきた歴史的記憶と、現代におけるその再利用。

第 4 節 具体的な分析ツール：言説戦略とトポス

DHA の分析において中核となるのは、肯定的な「自己表象 (Us)」と否定的な「他者表象 (Them/Other(s))」がいかに構築されるかを解明することである。本研究では、Reisigl & Wodak (2009) および Wodak (2021) に基づき、以下の 5 つの「言説ストラテジー (Discursive Strategies)」を用いて AfD のテキストを分析した (Reisigl & Wodak, 2009, p. 94)。

(1) 指名ストラテジー (Nomination Strategies) :

社会的アクター (移民、政治家、EU) をどのような名称で呼ぶかという「カテゴリー化」のストラテジーである (Reisigl & Wodak, 2009, p. 94)。移民を「侵略者」、EU を「官僚機構」と呼称することで、排除の境界線がいかに引かれているかを分析する。

(2) 叙述ストラテジー (Predication Strategies) :

指示されたアクターに対して、どのような形容詞や属性を付与し、評価 (善/悪、優/劣) を行うかというストラテジーである (Reisigl & Wodak, 2009, p. 94)。イスラームを「異質な」、EU を「非民主的な」と形容する評価的語彙を抽出し、Koselleck のいう「非対称的対概念」の現代的適用を検証する。

(3) 論証ストラテジー (Argumentation Strategies / Topoi) :

差別的・排外的な主張や、政治的要求を正当化するために用いられる論理の型 (トポス) である (Reisigl & Wodak, 2009, p. 94)。Wodak (2021) によれば、現代の右翼ポピュリズムは、不確実な社会状況において有権者の不安を動員する「恐怖の政治 (Politics of Fear)」を展開し、特定のトポスを用いて排除の論理を「常識」として正当化・常態化 (Normalization) している。本研究では、特に以下のトポスに注目する。

- **脅威と危険のトポス (Topos of Threat and Danger) :**

「移民やイスラーム化は、我々の安全とアイデンティティを脅かす」という論理。

- **救世主のトpos (Topos of the Savior) :**

「既存のエリートは失敗した。我々 (AfD) だけが Abendland を救うことができる」という自己正当化の論理。

- **人民のトpos (Topos of the People) :**

「我々は『真の国民』を代表しているが、EU は国民の意志を無視している」というポピュリズム特有の戦略。

(4) 観点化ストラテジー (Perspectivization Strategies) :

発話者がどの視点から語っているか、誰の声を代弁しているかというストラテジーである (Reisigl & Wodak, 2009, p. 94)。AfD がいかにして「被害者 (犠牲になった国民)」の視点を採用し、エリートを批判しているかの分析を行う。

(5) 強調と緩和ストラテジー (Intensification / Mitigation Strategies) :

命題の確信度を強めたり弱めたりする修辞である (Reisigl & Wodak, 2009, p. 94)。移民の脅威を「洪水」のように激化して語るレトリックの分析を行う。

第 5 節 方法論的統合の理論的背景：概念史と DHA の架橋

本研究の方法論的独自性は、Koselleck の概念史と、Wodak らの DHA を理論的に架橋し、統合的に運用する点にある。両者は共に「言語」と「歴史的現実」の緊張関係を扱うアプローチであるが、本研究では以下の 3 つの理論的接点に基づき、これらを相互補完的に適用する。

1. 概念の「多義性」とディスコースの「文脈依存性」の接合

Koselleck によれば、「概念 (Concept)」とは単なる語彙とは異なり、歴史的な経験の総体や、現実における政治的・社会的な文脈の多義性が、その一語の中に不可分に凝縮されたものである。概念は常に多義的であり、過去の意味の蓄積 (記憶) と現在の政治的要請の間に緊張関係を孕んでいる (Koselleck, 2002, p. 85)。特に社会的ないし政治的概念は、当時の政治／経済／社会状況に照らし合わせて理解されると同時に、その双方の変容を辿ることで現代における意味が理解される。すなわち、概念と社会について、共時的に状況を確認し通時的な変容を捉えることによって初めて、異なる年代から継承されてきた意味の多重的な層化を解明することができる (Koselleck, 2004, pp.89-90)。

一方で、DHA は、言語行為が常に特定の社会的・歴史的な文脈 (Context) に依存して意味を持つと仮定し、テキスト分析において「歴史的な文脈 (historical context)」の考慮を不可欠とする (Reisigl & Wodak, 2009, p. 95)。

本研究では、「Abendland」という概念が持つ Koselleck 的な「多義性 (過去の歴史的意味の堆積)」が、DHA の分析対象である現代の AfD の綱領や演説という具体的な「文脈」において、いかに選択的に動員され、特定の政治的意図のために固定化されようとしているかを分析する。すなわち、概念史は分析対象である言葉の「歴史的深層」を提供し、DHA はその言葉が現在において機能する「現場」を提供する役割を担う。

2. 「再文脈化」と「時間の地層」の相互補完

DHA の重要な分析概念に「再文脈化 (Recontextualization)」がある。これは、ある要素 (トposや議論) が元の文脈から切り離され、新しい文脈へと移植されるプロセスを指す (Reisigl & Wodak, 2009, p. 90)。このプロセスは、Koselleck が提唱した「時間の地層 (Zeitschichten / Sediments of Time)」の概念と符合する。すなわち、概念の中に重なり合った異なる時代の意味は同時代において「非同時性の同時性 (the contemporaneous of the

noncontemporaneous)」として共存し、再文脈化される。

本研究が対象とする AfD による Abendland 概念の使用は、単なる懐古趣味ではなく、過去の「時間の地層」（例：オスマン帝国との戦い、冷戦期の反共主義）の中から特定の層を掘り起こし、それを現代の「難民危機」や「EU 批判」という新しい文脈へと「再文脈化」する行為である。これについてはヴァイスも、「Abendland」が『複雑な歴史を単純な構図に還元する世界観である』と認めている（ヴァイス、2019、p.231）。本研究では、この歴史的な意味の転移がいかに行われているかを、両手法の統合により解明することを試みた。

3. 「非対称的対概念」と「排除の言説戦略」の統合

Koselleck(2004)は、政治的な自己定義が常に他者を否定的に規定する「非対称的対概念（Asymmetric Counterconcepts）」の構造を持つことを指摘した。歴史的には「ヘレネス対バルバロイ」「キリスト教徒対異教徒」などがこれに該当し、これらは自己を普遍的な善と定義し、他者を対等な権利を持たない存在として排除する（Koselleck, 2004, pp. 155-191）。この概念史的洞察は、Wodak (2021) が指摘する現代右翼ポピュリズムの「恐怖の政治（Politics of Fear）」および「肯定的な自己表象と否定的な他者表象（Positive Self- and Negative Other-Presentation）」という言説戦略と完全に符合する（Wodak, 2021, Chap. 1; Reisigl & Wodak, 2009, p. 94）。

本研究では、Abendland がいかにして現代における「非対称的対概念」として機能し、イスラームや EU を「文明の敵」として排除する論理を構築しているかを、DHA の具体的ツール（叙述戦略、論証戦略）を用いて実証的に分析した。すなわち、Koselleck の理論は「排除の構造」を説明し、Wodak の DHA はその「排除の実践的メカニズム」を解明するために用いた。

第 6 節 分析プロセスとマトリクス

上述の理論的視座と分析ツールを体系的に適用するため、本調査は以下の 3 段階のフェーズを経て実施された。各フェーズにおける分析対象と使用ツールの対応関係は以下の通りである。

分析フェーズ	分析の目的と課題（RQ 対応）	理論的視座	使用する DHA ツール	対応資料
①歴史的文脈化	概念の多義性の把握 Abendland の「経験の空間」と「期待の地平」の歴史的変遷を確認する。	概念史(意味の地層)	-	-
②排外主義の構築	RQ1: 排外主義の実態 AfD がいかにして「我々（Abendland）」と「彼ら（Islam）」を定義・差別化しているか。	非対称的対概念／DHA（戦略 1, 2, 5）	指示戦略叙述 戦略激化戦略	PEGIDA の文書 ／AfD 選挙綱領
②接続論理の解明	RQ2: 排外主義的な危機感がいかにして EU 批判の論拠（正当化）となっているか。	再文脈化 DHA（戦略 3, 4）／恐怖の政治	各種ストラテジーやトpos	AfD 選挙綱領

第 7 節 言説分析の対象とする資料と分析手順

本研究の信頼性を担保するための分析対象資料（コーパス）として、AfD の結党（2013 年）から直近の連邦議会選挙（2025 年）に至るまでの公式プログラムを中心に分析をおこなった。また、AfD の思想的源流となった社

会運動 PEGIDA の記録を収集した。

1. 一次資料：AfD の党公式文書

AfD のイデオロギー変遷を通時的に捉えるため、以下の文書群を分析対象とした。ただし、文言が非常に似ているまたは同一であることが多く見られたため、いずれも最新年度のものを取りわけ詳細に分析した。

- **党基本綱領 (Grundsatzprogramm)**

- *Programm für Deutschland* (2016 年)
- 分析意図：党の「憲法」における「Abendland」「Islam」「Kultur」の公式定義を特定する基準点として使用する。

- **連邦議会選挙綱領 (Bundestagswahlprogramm)**

- 対象年：2013 年、2017 年、2021 年、2025 年
- 分析意図：国内政治に向けたメッセージの変遷を追う。特に、2013 年の「経済中心」の言説から、2017 年以降の「アイデンティティ中心」の言説へのパラダイムシフトを検証する。また、2025 年の最新綱領においては、排外主義的トposがいかにして社会的受容性を獲得し、政治的言説の主流 (Mainstream) へと浸透・定着したかを確認する。

- **欧州議会選挙綱領 (Europawahlprogramm)**

- 対象年：2014 年、2019 年、2024 年
- 分析意図：本研究の核心である「排外主義から欧州懐疑主義への接続」を検証する主たるフィールド。2014 年の「ソフトな懐疑主義(改革要求)」から、2019 年・2024 年の「ハードな懐疑主義(Dexit/EU 解体論)」への過激化プロセスにおいて、Abendland 概念がいかにかに正当化根拠として機能したかを分析する。

なお、AfD の公式文書 (綱領) は、党内の多様な意見 (穏健派 vs 過激派) が調整・折衷された最終成果物であり、党の公式な集合的アイデンティティを最も正確に反映しているため、個人的な意見が強く反映された個人のツイートや発言集よりも、本研究の分析対象として最適である。

2. 補助資料：PEGIDA 運動の言説

AfD における「Abendland」概念の系譜 (Genealogy) を特定するため、以下の資料を補助的に活用した。

- PEGIDA の「PEGIDA の 19 項目 (Positionspapier der PEGIDA: 19 Punkte)」

- 対象年：2014 年
- 分析意図：AfD が政党としてこの概念を本格的に採用する以前に、街頭運動レベルにおいて Abendland がいかにかにして反エリートおよび反イスラームの闘争概念として再文脈化されていたかを確認し、AfD への言説的影響関係を特定する。

3. 分析の手順

収集したコーパスに対する分析は、Reisigl & Wodak (2009) が推奨する「らせん状の分析モデル (cyclical analysis)」に基づき、以下の 4 段階のプロセスを経て実施した。

(1) 予備的分析とスクリーニング (Content-oriented selection)

まず、全コーパスに対してキーワード検索を行い、分析対象となるテキスト断片を抽出した。検索語には、文明論的語彙 (Abendland、Christentum、Leitkultur など) および政治的対立項 (Islam、EU など) を設定した。さらに、関連政策についても目を通し、重要な箇所は文章ないし段落単位で抽出した。抽出されたセクションについて、それぞれの語がどのような文脈で使用されているかを確認し、重点的に分析すべき主要なパッ

セージ (key passages) を特定した。

(2) ミクロ分析：言説戦略の特定 (Micro-analysis)

特定された主要パッセージに対し、DHA のカテゴリーに基づく詳細な言語学的分析を行った。具体的には、以下の手順でコーディングを実施した。

- 指示・叙述戦略の分析:

Abendland (我々) および Islam/EU (彼ら) に対して、どのような呼称 (例: 愛国者、侵略者) や形容詞 (例: 自由な、危険な) が付与されているかを特定し、社会的アクターの境界線がいかに構築されているかを記述した。

- 論証戦略 (トポス) の分析:

Wodak (2021) の分類に基づき、排外主義や EU 批判を正当化するために用いられている論理の型 (脅威のトポス、救済者のトポス等) を同定した。

(3) マクロ分析：概念史的考察と文脈化 (Macro-analysis)

ミクロ分析で得られた知見を、Koselleck の概念史的視座を用いて解釈した。

- 時間構造の分析:

抽出された Abendland 概念の中に、どのような過去の記憶 (経験の空間) が喚起され、どのような未来像 (期待の地平) が投影されているかを分析した。

- 文脈との結合:

テキスト内の議論を、DHA の 4 レベルの文脈 (テキスト間関係、当時の社会政治的状況、歴史的文脈) と照らし合わせ、その発言がなされた際の政治的意図 (例: 選挙キャンペーン、難民危機への反応) を特定した。

(4) 通時的比較と統合 (Diachronic comparison)

最後に、2013 年から 2025 年までの各文書における分析結果を時系列で比較した。初期の経済自由主義的な EU 批判から、後期の文明論的な排外主義へと、「Abendland」概念の機能がいかに変容し、その変容がどのような政治的效果 (欧州懐疑主義の過激化) をもたらしたかを結論づけた。

第 2 章 「Abendland」の概念史：起源から現代までの変遷

本章では、ドイツの政治的言説において中心的な役割を果たしてきた「Abendland」概念の歴史の変遷を、多数の先行研究の整理を通じて確認する。第 1 章で確認した Koselleck の概念史的視座に基づき、この言葉が単なる地理的名称から、いかにして政治的闘争概念へと変化し、異なる時代の「意味の地層 (Zeitschichten)」を堆積させてきたかを明らかにする。

「Abendland」は、その歴史を通じて一貫した意味を持っていたわけではない。ヴァイスが指摘するように『「タベの国」という概念の意味を捉えるためには、各時代で誰を敵とするか (中略) によって、どのように唱えられていたかを考える必要がある』(ヴァイス、2019、p. 264)。むしろ、ある時は「異教徒」を、ある時は「リベリズム」を、そしてある時は「共産主義」を排除するための境界線として、その都度再定義され続けてきた可変的な概念である。

第1節 起源と前近代：キリスト教的ヨーロッパとしての形成

「Abendland (Occident)」という概念の最も古く、かつ深層に位置する地層は、宗教的な境界設定に基づいている。本節では、その語義的起源から、キリスト教世界との同一化、そして教派対立による概念の政治化に至るプロセスを論じる。

1. 「Abendland」の語義と地理的表象

「Abendland」は、「Morgendland」と対となる語である。板橋 (2016) が指摘するように、これはドイツ語で「晩」「日没」を指す「Abend」と、「土地」を指す「Land」が結合した語であり、ラテン語の「Occidens (落日)」、英語の「Occident (西洋)」に対応する。対する「Morgenland」は「Morgen (朝／日の出)」、すなわち「Oriens (オリエント／東洋)」に対応する (板橋、2016、p. 13)。概念史的に重要であるのは、この語が単なる方位 (西) を示すだけでなく、歴史的・文化的な価値判断を伴う「空間表象」として機能してきた点である。Staatspolitik によれば、「Abendland」は『ヨーロッパの西部及び中部地域を指す伝統的な呼称であり、5 世紀に西ローマ帝国が崩壊した後、ゲルマン民族による土地の占領と国家形成、そしてラテン系キリスト教の浸透によって特徴づけられた地域である』とされる⁽²⁾。そのため、「Abendland」はヨーロッパと互換的に用いられ、文脈によるが日本訳としては「西洋」「西欧」などもこれに当たる (板橋、2016、p. 13)。遠藤と板橋が指摘した「ヨーロッパ」の語源と「Abendland」の語の成り立ちとが近似していることは、「ヨーロッパ」という概念自体が、アジアやアフリカといった「外的世界」との関係の中で境界線が引かれる相対的なものであったのと同様に (遠藤、2024、p. 22)、「Abendland」＝「西」もまた同時代に出現した「Morgendland」＝「東」という対概念との緊張関係の中で、自らを定義するための地理的・精神的概念として成立したのである。

2. キリスト教世界 (Christendom) との同一化

中世ヨーロッパにおいて、Abendland は地理的な境界を超え、精神的な共同体としての「キリスト教世界 (Christendom / Christianitas)」とほぼ同義となった。もとより、4 世紀 (380 年／392 年) にローマ帝国がキリスト教を国教とし他の宗教を禁じたことによって、「ヨーロッパ」＝ローマ帝国の支配地域とキリスト教とが結びついた (遠藤、2024、p. 23)。Forlenza & Turner (2019) の分析によれば、ローマ帝国の崩壊後、政治的統一を失った西欧社会において、カトリック信仰は唯一の共通アイデンティティを提供した。ここで Abendland とは、普遍的なキリスト教的真理を共有する空間を意味し、世俗的な国家の境界を超えた神聖な共同体 (Corpus Christianum) として想像された (Forlenza & Turner, 2019, pp. 6-9; 脚注 2)。

さらに重要なのは、この概念が「東方」との二重の差異化によって鍛え上げられた点である。第一に、キリスト教圏内部における差異化である。遠藤 (2024) が指摘するように、西ローマ＝神聖ローマ帝国としての「Abendland」は、東ローマ (=ビザンツ帝国) および正教会との対立概念であった (遠藤、2024、p. 23)。1054 年の大シスマ (東西教会の分裂) 以降、Abendland は単なるキリスト教世界一般ではなく、特にローマ教皇を頂点とする「ラテン・カトリック世界」としての性格を強めた。これは、特に後世でのイメージにおいて、カロリング朝や神聖ローマ帝国と「Abendland」の結び付きを強化するものである。第二に、イスラームとの差異化である。7 世紀以降のイスラーム勢力の拡大は、領域としての「Abendland」を軍事的・宗教的に脅かす最大の他者であった。

3. 「東方 (Morgenland)」との対抗関係

そしてこの概念は、外部の「他者」との遭遇において決定的重要性を持つ。十字軍の遠征や、その後のオスマン帝国によるウィーン包囲 (1529 年、1683 年) といった歴史的危機を通じて、「Abendland」は「東方 (Morgenland

／Orient)」に位置する「異教徒（特にイスラーム）」との対比によって自己定義された。このとき、「Abendland」は異教徒から文明を守るための「キリスト教の砦（Antemurale Christianitatis / Bulwark of Christendom）」という概念として機能する。この点でヴァイスが、『イスラームとの他行けるが主たるテーマになることはほとんどなかった』という記述は否定される（ヴァイス、2019、p. 265）。

Forlenza (2017) が指摘するように、この段階で「Abendland」には「キリスト教信仰を守るための防衛砦（Bulwark）」という意味が付与された。この「対イスラーム防衛」という原初的な意味の層は、長らく潜伏していたものの、現代の PEGIDA や AfD の言説において「Abendland」の「イスラーム化（Islamisierung）」への恐怖という形で、極めて感情的な動員力を持って再活性化されることになる。

こうして、キリスト教圏内（対ビザンツ・対正教）で対置されるとき、「Abendland」は「カトリック的」な性格を帯びただけでなく、イスラームと対置されるとき「Abendland」には「キリスト教全体」との紐帯が現れるという重層構造が形成されたのである。

第2節 ヴァイマル期：Spengler による大衆への膾炙と保守革命による政治的概念化

第一次世界大戦後の戦間期＝ヴァイマル共和国期において、「Abendland」概念は近代的な政治闘争の舞台へと引きずり出され、語義としての決定的な転換を迎える。それは「没落」の危機感と結びつき、反近代・反リベリズムの象徴となる。すなわち、この危機（Krisis）の中で「Abendland」概念は、単なる宗教的＝文化悲観主義の表現にとどまらず、ヴァイマル共和国の正統性（民主主義・自由主義）を否定し、新たな権威主義的秩序を待望するための鋭利な政治的武器として再鍛造された。本節では、O. Spengler による「Abendland」概念の大衆化と、「保守革命」の知識人たちによる「反リベラル」な政治概念化のプロセスを論じる。

1. Spengler における「Abendland」：運命論から政治的行動へ

1918 年（第 1 巻）及び 1922 年（第 2 巻）に出版された Oswald Spengler の『西洋の没落（Der Untergang des Abendlandes / 英：The Decline of the West）』は、敗戦後のドイツ社会に衝撃を与え、Abendland という言葉をアカデミズムの枠を超えて大衆レベルにまで浸透させた。しかし、Lewis (2022) が指摘するように、Spengler の歴史哲学は、その歴史的大著の題名とは異なり、単なる受動的な運命論（Fatalism）ではない。彼は「没落」という診断を通じて、当時の政治状況に対する極めて能動的な処方箋を提示していた（Lewis, 2022, pp. x-ix）。

López-Marcos & Martín (2019) もまた、この点について哲学的な側面から補強を行う。彼らは「Abendland」という言葉が含意する「日没」は、光の喪失であると同時に、翌朝の再生を約束する循環的な現象であると指摘する。すなわち Spengler にとっての「没落（仏：décadence）」とは、完全な死滅ではなく新たな「飛躍（仏：élan）」へと至るための不可欠な変容プロセスとして捉えられていたのである（López-Marcos & Martín, 2019, pp. 3-7）。まさにこれが Spengler が提唱した「歴史形態学（Geschichtsmorphologie）」である（稲葉、2020）。

第一に、「文化（Kultur）」と「文明（Zivilisation）」の峻別である。Spengler にとって Abendland の歴史は、創造的で有機的な魂を持つ「文化」の段階から、知性的で人工的な「文明」の段階への不可避的な移行プロセスとして描かれる。彼は、英仏的な「自由主義」「民主主義」「議会政治」を、生命力を失った「文明」の徴候として断罪し、対照的にドイツ的な精神を「文化」の最後の砦として位置づけた（Lewis, 2022, pp. 67-85）。

第二に、「カエサル主義（Caesarism）」の肯定である。Spengler は、「文明」の末期においては、金権政治（Money）と化した民主主義は機能不全に陥り、必然的に個人のカリスマに基づく強権支配、すなわち「カエサル主義」が到来すると予言した。Lewis (2022) によれば、Spengler にとっての「Abendland の防衛」とは、民主主義を守るのではなく、むしろその崩壊を加速させ、来るべきドイツ的独裁者（カエサル）のために道を切り開くことを

意味した (Lewis, 2022, p. 51; 稲葉、2020、pp. 9-11)。

Spengler は政治パンフレット『プロイセンの特性と社会主義 (Preußentum und Sozialismus)』(1919) において、このビジョンを具体化し、リベラリズムとマルクス主義の双方を「唯物論的」として排し、規律と義務に基づく「プロイセン的社会主義」こそが「Abendland」を再生させる唯一の道であると説いた (Lewis, 2022, pp. 86-112)。

2. 「保守革命」の特徴：黙示録的な歴史意識と「オルタナティブな近代」

Spengler が提示した反民主主義的な Abendland 像は、A. Mohler が「保守革命 (Konservative Revolution)」と総称した右翼知識人たち (Moeller van den Bruck, Carl Schmitt, Ernst Jünger ら) によって共有され、より政治的な闘争エネルギーへと先鋭化された。

稲葉 (2020) によれば、保守革命とは、敗戦と革命による帝政崩壊後、「反議会制民主主義・反自由主義・反ヴェルサイユ体制・反ヴァイマル共和国」の旗印の下に生まれた、反市民的性格を持つドイツ青年ナショナリストの運動である。その思想は、単なる過去への回帰 (反動) ではなく、過度な合理化や個人主義に対抗しつつ、技術や大衆動員といった近代の成果を取り込む「オルタナティブな近代」の模索であった (稲葉, 2020, pp. 1-4)。

稲葉 (2020) は、この運動を貫く共通の心性を「黙示録的 (apocalyptic)」な歴史意識に見出している。彼らにとって第一次世界大戦は、古い時代と新しい時代を画する決定的な転換点 (カイロス) として経験された。その歴史観は、「国民国家の没落への不安」と、そこから救済をもたらす「新たなライヒ (帝国) の勃興への期待」という二つのベクトルによって構成されていた (稲葉, 2020, pp. 1-2)。すなわち、保守革命の論客たちにとって「Abendland の危機」を語ることは、現在のヴァイマル体制 (= 没落すべき古い世界) を徹底的に破壊し、その廃墟の上にユートピア的な「新しいライヒ」を建設するための革命的暴力を正当化する論理だったのである。

3. 「ライヒ」対「西側」: Abendland の政治的機能

保守革命によって鍛え上げられた Abendland 概念は、ヴァイマル共和国の政治 (思想) 空間において、二つの敵対的なベクトル——空間的な「西側」への対抗と、時間的な「ライヒ」への待望——を統合する結節点として機能した。

(1) 対抗概念としての「Abendland」と「西側」

Conze (2015) の詳細な分析によれば、ヴァイマル期の右翼言説において「Abendland」は、「西側 (Der Westen / The West)」という概念と鋭く対立させられていた。当時のドイツにおいて「西側」とは、単なる地理的方位ではなく、第一次世界大戦の戦勝国 (仏・英・米) と、彼らが体現する「1789 年の理念 (自由・平等・友愛)」、議会制民主主義、そして資本主義文明を指す政治的コードであった (Conze, 2015, pp. 74-76)。

Conze (2005) はさらに、この対立構造の背景にドイツ特有の「中欧 (Mitteleuropa)」意識があったことを指摘する。保守派にとって、ドイツは西側のリベラリズムや多元主義にも、東方のポリシェヴィズムにも属さない独自の精神的空間であった。彼らは「Abendland」という言葉を用いることで、ドイツを「西側」から切り離し、ある種の「反リベラルなヨーロッパ (Anti-liberal Europe)」の盟主として位置づけようとしたのである⁽³⁾ (Conze, 2005, pp. 45-52; Conze, 2015, pp. 73-77)。すなわち、この時期の Abendland は、「西側の一員」となるための概念ではなく、むしろ「西側の普遍主義 (民主主義の人権)」を拒絶し、ドイツ固有の文化的自律性を守るための防壁 (Bulwark) として機能していた。

(2) 「没落」と「ライヒ」の黙示録的結合

空間的な「西側」への拒絶は、時間的には「ライヒ (Reich/帝国)」の神話と結びつくことで、強力な革命的エネルギーを帯びることになる。

稲葉 (2020) によれば、保守革命の思想家たち (Moeller van den Bruck ら) は、第一次世界大戦を「古い時代の終わり」と「新しい時代の始まり」を画する決定的な転換点と捉えるキリスト教の「黙示録的 (apocalyptic)」な歴史意識を共有していた。彼らの歴史観は、Spengler 的な「国民国家の没落への不安」と、そこから救済をもたらす「新たなライヒの勃興への期待」という、一見矛盾する 2 つのベクトルによって構成されていた (稲葉, 2020)。

この二重性は、López-Marcos & Martín (2019) が「ヨーロッパの悲劇的アイデンティティ」と呼ぶものと共鳴する。彼らによれば、Abendland の本質は「没落 (décadence)」の自覚と、そこから生じる「飛躍 (élan)」への意志という絶え間ない緊張関係にある。保守革命にとって、ニヒリズムや危機の深まりは、古い道徳から解放され、新たな価値 (ライヒ) を創造するための必要条件として肯定されたのである (López-Marcos & Martín, 2019, pp. 9-12)。

ここで重要なのは、Abendland 概念がこの「没落」と「再生」のドラマを演じる舞台となった点である。この「不安」と「期待」の 2 つのベクトルは「反国民国家・反ヴァイマル共和国」という共通の軸の上に存在した (稲葉, 2020, p. 12)。そして Conze (2005) が論じるように、彼らが待望した「ライヒ」とは、過去の神聖ローマ帝国への単なる郷愁ではなく、国民国家や議会制民主主義を超越した、すなわち 2 つのベクトルから止揚された、有機的で階層的な「新しい超国家秩序」のビジョンであった (Conze, 2005, pp. 38-42; 稲葉, 2020, pp. 12-14)。

Spengler は、第一次世界大戦前のドイツ帝国を没落する「Abendland」の文明国とは見なしていなかった (ヴァイス, 2020, pp. 27-28)。稲葉 (2020) の視座を借りれば、Abendland の危機を叫ぶことは、現在のヴァイマル体制 (= 没落すべき西側的な「文明」) を徹底的に破壊し、その廃墟の上にユートピア的な「第三のライヒ」= 「第三帝国」を建設するための革命的暴力を正当化する論理だったのである (稲葉, 2020, pp. 14-16)。

4. 結論：戦間期の「Abendland」の政治的概念化

以上の Conze と稲葉の分析を総合すると、ヴァイマル期の Abendland 概念が持っていた政治的機能は、以下の二重性によって特徴づけられる。

- **対外的機能 (主に Conze) :**

「東方 (ポリシェヴィズムとアジア的野蛮)」と「西側 (魂なき文明)」の双方から、ドイツの本質 (Kultur) を守るための「二重の防波堤」。

- **対内的機能 (主に稲葉) :**

「没落」の恐怖を煽ることで現状 (民主主義体制) を否定し、「第三帝国」という救済のビジョンへ向けて大衆を動員するための「黙示録的革命」の手段。

この時期に形成された「Abendland=反西側・反自由主義・反議会主義・反民主主義・ライヒ待望」という思想的地層は、「危機をテコにして再生 (革命) を正当化する」という構造を持っていたのである。そして現実の政治においては、ナチズムによる人種主義的過激化への道を開いたのみならず、現代の右翼ポピュリズムが EU を「リベラルな西側の押し付け」と見なし、国民国家の主権回復を「没落からの救済」として語る際の深層的な論理基盤として機能し続けている可能性がある⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

第 3 節 戦後／冷戦期：欧州統合と反共反米

1945 年のナチズムの崩壊と、それに続く冷戦の開始は、ドイツにおける「Abendland (西洋)」概念に、劇的かつ決定的な機能転換 (semantic reversal) をもたらした。第 2 節で論じたように、ヴァイマル期において「西側

（リベラリズム）」への対抗概念として機能していたこの言葉は、戦後、逆説的にもドイツが「西側」の一員となり、欧州統合へと参画するための道徳的・政治的正当化の論理として再利用された。

本節では、R. Forlenza (2017, 2018) および V. Conze (2005, 2015) の研究に基づき、戦後ドイツの政治的主導権を握ったキリスト教民主同盟（CDU/CSU）が、この概念をいかにして受容・再定義し、欧州統合を「キリスト教的プロジェクト」として正当化するためのメタ政治的基盤として確立したかを論じる。

1. キリスト教民主主義による概念の受容と「西側結合」

1945 年の「ドイツ零年（Stunde Null）」において、ドイツは未曾有の物質的破壊だけでなく、深い精神的・道徳的な真空状態に置かれていた。かつて国民を統合していた「ナショナリズム」や「ライヒ（帝国）」の神話は、ナチズムの蛮行によって道徳的に破産し、使用不可能なものとなっていた。Forlenza (2017) によれば、この荒廃の中で、キリスト教民主主義者たちは、ドイツ国民に新たなアイデンティティと道徳的羅針盤を提供する必要に迫られていた。その時、彼らが再発見し、政治的中心へと引き上げたのが「Abendland」という概念であった（Forlenza, 2017, p. 262）。

(1) 「超国家的な愛国主義」の創出

K. Adenauer を中心とする CDU 指導部は「西側結合（Westbindung）」の過程において、ナチズムをドイツの歴史的伝統から切り離された「異教的逸脱」あるいは「キリスト教的西洋からの背教」として位置づける歴史戦略を採用した。Forlenza (2017) はこれを、汚染されたドイツ・ナショナリズムに代わる新たなアイデンティティとして他の西欧諸国と共通の「Abendland（西洋）」への帰属意識を創出した。これは一種の「超国家的な愛国主義（Supranational form of Patriotism）」、「西洋への愛国心」あるいは「ヨーロッパ愛国主義」の創出と分析している。（Forlenza, 2017, pp. 273-276）

この論理によれば、ドイツの「真の」姿はナチズム（東方的・全体主義的野蛮）ではなく、カール大帝以来のキリスト教的西洋（Abendland）の伝統の中にこそ存在する。ここに近代的な産物としての偏狭なナショナリズムや戦前のナチズム・ファシズムと時代を超越したヨーロッパの歴史や文明という秩序が対置された。

「Abendland」という同一文化背景に基づくヨーロッパ統一の定義は、戦前に肯定的な意味で想像され得たドイツの例外主義、すなわちドイツの特別な道（German Sonderweg）の可能性を排除することができたのである。したがって、ドイツ人は「国民（Nation）」としてではなく、「キリスト教西洋人（Christian Westerners）」として振る舞うことによってのみ、過去の罪を相対化し、再び文明社会（西側）の正当な構成員として道徳的にリハビリテーションされることが可能になったのである（Forlenza, 2017, pp. 271-276; Conze, 2015, pp. 77-78）。

敗戦したドイツ（当時は西ドイツ）は同一のものとして再建されるのではなく、生まれ変わり再現する必要があった。すなわちそのための「Abendland」は「地理的」概念ではなく「精神的・歴史的」概念である必要があった。これについて Adenauer は「我々は自国の文化が再び Abendland 文化に基盤を見出すことを望む」と発言した（脚注：Forlenza を筆者訳）。Forlenza (2017) は、それを Spengler の思想を継承したものだと評価している。すなわち、ドイツは、常に文化的のみならず文明的に西欧世界に属していたということであり、西欧諸国と同等の存在として生まれ変わる必要があるということを Adenauer が認識していたということである。（Forlenza, 2017, pp. 271-273）。

(2) 概念の連続性と断絶

Conze (2015) は、この転回を支えたのが「概念の連続性」であったと指摘する。Abendland という言葉は、ナチス体制下においても、弾圧されていたカトリック保守層や知識人の間で「反ナチズム」の符丁としてたしかに維持されていた。そのため、非ナチ化が行われた戦後ドイツにおいても直ちに「道徳的再生」のシンボル

として動員することが可能であった。(Conze, 2015, pp. 79-81)

しかし、ここには重大なパラドックスが存在した。Conze (2015) が鋭く指摘するように、戦後の「Abendland」概念は、「西側」への統合を志向しつつも、ヴァイマル期以来の「反リベラル (anti-liberal)」な性格を完全には払拭していなかった。保守派にとって、ナチズムの克服とは、リベラルな民主主義の導入だけでなく、神を忘れた「世俗化」と「大衆社会化」への抵抗をも意味していたからである (Conze, 2015, pp. 79-81)。

さらには「Abendland」が持つカトリック要素も重要である。(戦後という)『移行期にカトリック教会が特別な魅力をもったのは、それが古い秩序と結びついて、近代性や変化に対して実際上の堅固な防壁となったからだ』とジャットが指摘するように (ジャット、2008、p. 294)、カトリック的な要素を多分に有していた「Abendland」が人々に受け入れられやすい、あるいは魅力をもたれやすい、「古い秩序」との連続性を有しや「近代性」に抗う概念であったことも指摘できるだろう。この指摘は、北欧やイギリスなどのプロテスタント地域において、ECSC 構想 (=シューマンプラン) やその設立に『権威主義的なおいが感じられた』こと、『カトリックが圧倒的多数を占めている』ために相反感情を抱いたこと、『カトリックの「黒いインター」結成への第一歩』という感想を抱いたことなどにも裏打ちされる (ジャット、2008 年、pp. 202-203)。

2. 「カロリング的」欧州統合のビジョンと宗教的基盤

キリスト教民主主義が描いた戦後の欧州統合 (European Integration) の地図は、機能主義的な経済共同体にとどまらない、極めて歴史的かつ宗教的な色彩を帯びた文明論的プロジェクトであった。Forlenza (2017) はこれを「新しい Abendland」と表現した (Forlenza, 2017, p. 268)。

(1) カロリング朝の復活

Forlenza (2017) が詳細に論じるように、Adenauer や R. Schuman (仏外相)、A. De Gasperi (伊首相) といった「欧州の父たち」のビジョンは、プロテスタント的・軍国主義的な「プロイセン (東方志向)」の伝統を否定し、カトリック的・ラテン的な「カロリング帝国 (西方志向)」の記憶を呼び覚ますものであった。彼らにとって、1950 年代に欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) や欧州経済共同体 (EEC) を形成した「原加盟 6 カ国 (The Six)」(西ドイツ、フランス、イタリア、ベネルクス) が、かつての神聖ローマ帝国やフランク王国の版図と地理的に重なっていたことは、単なる偶然ではなかった。ヨーロッパの歴史や文明という秩序を偏狭なナショナリズムや戦前のナチズム・ファシズムと対置させたキリスト教民主主義のナラティブは、すなわち中世の理想としてのキリスト教ヨーロッパの超国家主義的な構想 = キリスト教民主主義のヨーロッパ主義を実現可能にするものであった (Forlenza, 2017, pp. 263-264, 273-275)。

(2) 独仏和解の神聖化

この「カロリング的」な Abendland 観において、ドイツとフランスの和解は、単なる政治的・軍事的な安全保障契約以上の意味を持っていた。それは、千年にわたる分裂 (ヴェルダン条約以来の東西フランクの対立) を克服し、共通の母体である「キリスト教的西洋」へと回帰するための精神的な儀式として位置づけられた。Adenauer と Schuman (共に敬虔なカトリック教徒であり、ドイツ語とフランス語のバイリンガルの背景を持つ) の個人的な紐帯は、この「精神的兄弟愛」の物語を象徴するものであり、欧州統合に宗教的なオーラを付与する機能を果たした (Forlenza, 2017)。欧州統合のカトリック的オーラについては、先述のジャットの記述からも確認することができる。

(3) プロテスタントとの緊張関係

Hien & Wolkenstein (2021) は、このカトリック主導の統合観が、プロテスタント的な英国や北欧諸国を「欧

州の外部」あるいは「周縁」と見なす傾向を強めたと分析する。プロテスタント派（および社会主義者）は、欧州統合を「実利的な経済協力（市場）」として捉える傾向が強かったのに対し、カトリック保守派はそれを「均質的なキリスト教文明の防衛」として捉えた(Hien & Wolkenstein, 2021, pp. 1226-1228)。

結果として、戦後初期の欧州統合は、英国を排除し、カトリック勢力が優位に立つ「小ヨーロッパ」の枠組みで進行することとなった。ここには、Abendland 概念が本来的に内包していた「ラテン的・カトリック的」な排他性が、制度的な形をとって具現化していたと言える(Hien & Wolkenstein, 2021, pp. 1226-1228)。

「Abendland」に基づくカトリック主義的な欧州統合は、必然的に各国の加盟にも影響を与えた。統合初期段階において、オランダのプロテスタント系キリスト教民主主義政党は、統合をカトリック・バチカン主導のヨーロッパ再生、新たな神聖ローマ帝国、反宗教改革、あるいはカトリックの陰謀と見なしていた。さらに北欧のプロテスタント諸国が EU に加盟したのは、戦略的・経済的懸念が加盟を迫った結果であったことに加え、ノルウェーは未だに EU に加盟していない(Forlenza & Turner, 2019, pp. 16-17)。

3. 反共反米：冷戦下の二重の防波堤

Forlenza (2017) の分析における最も重要な洞察の一つは、戦後の Abendland 概念が、単なる「親米・反共」のスローガンに留まらず、独自の地政学的「第三の道」を示していたという点である。キリスト教民主主義者にとって、Abendland は以下の二つの「唯物論」に対する精神的な防波堤(Bulwark)として機能した。

(1) 対 東方：共産主義（無神論的ボルシェビズム）への対抗

第一の、そして最も明白な機能は、ソ連および共産主義に対する防衛である。西洋人としてのアイデンティティが常に疑わしいロシア人は、「Abendland」がそれをアジアの野蛮のイスラーム教勢力と同一視したことで、共産主義は単なる政治的・経済的な敵対勢力ではなく、神を否定し、人間の尊厳を抹殺する「アジア的野蛮」として描かれた。「Abendland」は、この「新しいイスラーム」「東方のボルシェビズム」の脅威から、自由と信仰を守るための最前線の砦(Christian bulwark)として再定義された(Forlenza, 2017, pp. 280-282)。

カーショールが、「西欧」という概念は地理的概念のみならず『冷戦以前は政治的概念としても存在していなかった』と指摘したように、こうした「西欧」概念は東の反ソ同盟の一つとして戦後自由民主主義の文脈において出現し強化されたのである(カーショール、2019、pp. 57-58)。

(2) 対 西方：アメリカ的自由主義（物質主義）への対抗

第二の、より潜在的だが重要な機能は、同盟国であるアメリカに対する文化的な防衛である。Conze (2015) および Forlenza (2017) が一致して指摘するように、ドイツの保守派は、アメリカが体現する「過度な個人主義」「放任資本主義」、そして「世俗的な物質主義」に対して深い警戒感を抱いていた。彼らは「西側結合(Westbindung)」を通じて NATO や西側陣営に加わりつつも、「Abendland」という概念を固持することで、精神的・文化的にはアメリカ化に抵抗しようとした。すなわち、カトリック社会教説に基づく「共同体」「家族の価値」「補完性原理」を維持し、行き過ぎたリベラリズムや世俗化の波からドイツ社会を防衛するための「文化的シェルター」として、「Abendland」を利用したのである(Forlenza, 2017, pp. 268-270; Conze, 2015, pp. 86-88)。

この「親米（軍事・政治）」と「反米（文化・精神）」の微妙なバランスの上に「新しい大西洋主義」を構築することで、ヨーロッパにおける「新しい Abendland」の戦後キリスト教民主主義のイデオロギーは成り立っていた。それは、完全なリベラリズムへの移行を躊躇する保守層に対し、「西洋の一員になること」と「ドイツ的・キリスト教的伝統を守ること」が矛盾しないという安心感を与えることに成功したからである(Forlenza, 2017, pp. 280-284)。

同時に、第二次世界大戦前の「Abendland」が持っていた要素はこのとき表出することはなかった。第2節で言及した「Abendland」反自由主義的な要素は、冷戦期とキリスト教民主主義の脱全体主義的文化による「大

西洋主義」というより大きな枠組みによって抑え込まれていたが、概念からその要素が消えたわけではない (Forlenza, 2017, pp. 283-284)。

4. 結論：冷戦下のパラドックスと現代への地層的遺産

以上の Forlenza 及び Conze の分析から、戦後／冷戦期の「Abendland」概念は、その転換期において第 2 節で確認したようなヴァイマル期の「反西側」的性格を払拭し、「西側結合」を遂行するための中心的概念であったことが明らかになった。しかし、それは無条件の「西側」の価値観＝民主主義・自由主義の受容ではなかった。Conze (2015) が結論づけるように、戦後ドイツの保守派は、「Abendland」という概念を用いることで、政治・軍事的には「西側 (NATO/EC)」＝「反共産主義」に結合しつつ、文化・精神的には「カトリック的保守主義」の領域を確保しようとする「二重戦略」を展開した。「Abendland」を支持する者にとって、その東西は、すなわち共産主義と自由主義は、依然として本質的に「非キリスト教的」な思想であった (Conze, 2015, pp. 79-81)。

この時期に確立された「Abendland」＝「キリスト教的文明 (の防衛)」という図式は、1960 年代以降の急速な世俗化と多文化化によって、一度は求心力を失ったかに見えた。しかし、Forlenza (2018) が警告するように、この概念が内包していた「宗教的・文化的な境界設定」のメカニズムは、21 世紀において「イスラーム」とい「非キリスト教的」な「他者」と対峙したことによって、極右／右翼ポピュリズムの強力な武器として召喚されている (Forlenza, 2018)。

第 4 節 「Abendland」概念史まとめ

本章では、複数の先行研究から、Abendland 概念には以下の 3 つの異なる「時間の地層」が堆積し、現代において複合的に機能していることが通時的分析によって明らかになった。以下に、3 つの時代を簡潔にまとめる。

- **中世的・宗教的地層：**

「東方」に対するキリスト教の「西ローマ＝神聖ローマ帝国＝ラテン・カトリック」意識。キリスト教内部においての「東方」は、「東ローマ＝ビザンツ帝国」であり、「キリスト教」それ自体にとっての「東方」は、「イスラーム」勢力であった。

- **ヴァイマル的・反近代的地層：**

「中欧」ないし「第三帝国」観念に基づいた、東西双方に対する「二重の防波堤」意識。戦間期の Abendland 「没落」の危機感と、近代的な自由主義の「西側」、野蛮なボルシェビズムの「東方」への敵対的思想から、ドイツ例外主義をも導いた。

- **戦后的・冷戦的地層：**

ヴァイマル期に生まれたドイツ例外主義の否定と、ヨーロッパ／ドイツの文化的・文明的な「西側」統合。共産主義に対する自由と民主主義の防波堤。そして冷戦下に、確かな反米主義とのバランスをもとる概念として機能した。

Koselleck の概念史の視座に従えば、現代で表出する概念としての「Abendland」を理解するには、本章で確認した概念の意味の地層を、政治・社会の変化との関連のもとに把握しておく必要がある。

第 3 章 現代の「Abendland」：文明的排外主義

本章では、現代（特に 2010 年代以降のドイツ）における「Abendland」概念の意味を特定し、その意味転回が可能となった政治社会的背景を確認する。前章で確認したように、戦後ドイツにおける「Abendland」は、キリスト教民主同盟（CDU）のヘゲモニーの下で、ドイツ例外主義＝ナチズムの過去を払拭し、「西側」陣営（NATO）やヨーロッパ（EU）への結合を正当化するための帰属先、すなわち「アイデンティティ」として機能した。

しかしヴァイス（2019/2020）が指摘するように、現代の極右／右翼ポピュリズム、とりわけ PEGIDA の拡大や AfD の台頭とともに、この概念は再び変容を遂げている。彼らの用いる「Abendland」は、もはやキリスト教的な信仰告白でも、冷戦的な反共反米スローガンでもない。それは、イスラームという「他者」に対抗するために、キリスト教を文化的アイデンティティとして再文脈化し、排除の論理を正当化するための「文明的境界線」である。本章では、この変容を捉えるための理論的枠組みとして「文明的排外主義（Civilizational Exclusionism）」を提示し、実際の政治言説において「Abendland」概念がいかにしてこの排外主義を駆動させているかを分析する。

第 1 節 「文明的排外主義」

本節では、本章の議論の基盤となる理論的枠組みとして、Brubaker (2017) や Yilmaz & Morieson (2022) らの議論を総合し、「文明的排外主義」の定義を行う。これは、伝統的なナショナリズムや人種主義とは異なり、宗教を「文明的・文化的遺産」として世俗的に再解釈することで、異質な他者（ムスリム）を排除する論理である。

1. 宗教ポピュリズム

現代の排外主義を理解する上で不可欠なのが、宗教とポピュリズムの結合、すなわち「宗教ポピュリズム（religious populism）」の概念である。

Halliday (1988) がイラン革命の分析において指摘したように、近代化の過程で宗教は消滅するのではなく、政治的動員のための強力なイデオロギー資源として機能しうる。現代ヨーロッパにおいてこの現象は、世俗化が進んだ社会という文脈で特異な形態をとる。すなわち、宗教的復興（リバイバル）としてではなく、世俗的な政治的アイデンティティの一部として宗教が動員されるのである（Halliday, 1988）。

Forlenza (2018) や Brubaker (2017) が論じるように、現代の右翼ポピュリストたちが参照するキリスト教は、神学的な「信仰 (faith)」や教義の実践を意味しない。むしろそれは、世俗化した社会において「我々 (Us / People)」と「彼ら (Them)」を峻別するための「文化 (culture)」や「帰属 (identity)」のマーカーとして機能している。これは、「信じるより属する (belonging rather than believing)」ないし「信じることなく属する (belonging without believing)」という逆説的な形態をとる (Forlenza, 2018; Brubaker, 2017)。

Brubaker (2017) は、北・西ヨーロッパにおけるこの傾向を「アイデンティティとしてのキリスト教 (identitarian Christianity)」と呼ぶ。そこでは、キリスト教は「信じるもの」から「属するもの」へと変質しており、実際にキリスト教的なものそれ自体のみならず、世俗主義、ジェンダー平等、言論の自由といったリベラルな価値観さえも、「キリスト教的文明の成果」として語られ、それらを共有しないとされるイスラーム教徒＝ムスリムを攻撃するための武器として動員される (Brubaker, 2017, pp. 1193-1195)。

2. 帰属意識の「文明主義」

Brubaker (2017) は、現代ヨーロッパのポピュリズムの焦点が、国民国家の枠組みに固執する従来の「ナショ

ナリズム」から、より広域な文明圏の防衛を掲げる「文明主義 (Civilizationism)」へと部分的にシフトしていると分析する (Brubaker, 2017)。

このシフトの駆動力となっているのが、「イスラームの脅威」という認識である。排外主義の論理において、他者はもはや「異なる国籍を持つ人々」ではなく、「相容れない文明 (イスラーム) に属する人々」として描かれる。Brubaker によれば、この「文明主義」の枠組みにおいては、ユダヤ教徒や性的マイノリティでさえも、イスラームという共通の脅威に対抗する限りにおいて、「我々の文明」の一部として包摂されるという逆説的な現象が生じる (Brubaker, 2017, pp. 1199-1201)。

Yilmaz & Morieson (2022) は、この現象を「文明ポピュリズム (Civilizational Populism)」と定義する。Taguieff (1995) が提唱したように一般的なポピュリズムは 2 つの対立軸を構築する。一方は垂直軸の対立 (vertical dimension) であり、「純粋な人民」と「腐敗したエリート」を明確にして人民を擁護し、エリートを非難する。他方は、水平軸の対立 (horizontal dimension) であり、「我々／自己 (people like us)」と「他者 (the outside)」に区別し、他者への非難に正当性を得ようとする (Taguieff, 1995)。Yilmaz & Morieson (2022) によれば、文明ポピュリズムとは、この対立軸に文明的要素を導入する政治スタイルである。ここでは、特に宗教は「文明」の境界線を引くための主要な資源となる (Yilmaz & Morieson, 2022)。

国内政治での対立にフォーカスするポピュリストは、文明論的レトリックを主に国内政治の領域で用いることで、国民的アイデンティティと帰属意識を定義するために機能させる。すなわち、彼らは狭義の国民国家 (ナショナリズム) ではなく、より広範な文明の観点から自己と他者の対立を構築することを試みている (Brubaker, 2017, p. 1191)。そしてしばしば宗教的・民族的少数派を抑圧・排除することを正当化し、彼らを国家とその宗教・文化に対する脅威として描くことを可能にする (Yilmaz & Morieson, 2022)。

3. 「文明的排外主義」モデル

以上の議論を踏まえ、本研究では、現代ヨーロッパの極右／右翼ポピュリズムに見られるムスリム排除の論理を「文明的排外主義 (Civilizational Exclusionism)」と定義する。この概念は以下の論理的連鎖によって構成される。

- **宗教の世俗化／文化化：**

宗教 (キリスト教) を信仰対象としてではなく、ヨーロッパ固有の「文化・文明的遺産」として受容する。そして世俗的価値観 (自由・民主主義や世俗の文化) とキリスト教を不可分なものとして結合させる。

- **文明による他者化：**

文明は宗教や価値観に基づいて構成される。宗教の違い (キリスト教対イスラーム) を、個人の信条の問題ではなく、共存不可能な「文明的異質性」として本質化し、ムスリムを「我々の社会秩序を脅かす危険な他者」として定義する。

- **排除の正当化：**

この文明的異質性を根拠として、リベラルな価値観や世俗的な秩序を守るためには、異質な文明に属する他者を排除することが正当、あるいは不可欠であると主張する。ここでは、差別は「偏見」ではなく「文明防衛のための合理的判断」として偽装される。

伝統的な人種主義が「生物学的差異」を、古典的なナショナリズムが「国籍・民族」を排除の根拠としたのに対し、文明的排外主義は「文明的な非互換性 (Incompatibility)」を根拠とする点に特徴がある。Yilmaz & Morieson (2022) が指摘するように、ここでは宗教に基づいた文明的分類が、人種差別的な排除を隠蔽し、正当化するための「文化的な偽装」として機能する (Yilmaz & Morieson, 2022, p. 6)。

以上から明らかなように、「文明」は宗教や価値観によって構成されている。特にヨーロッパにおいては、キリ

スト教的文化 (secularized Christianity-as-culture) や自由民主主義などのリベラルな価値観がその構成要素となり、イスラームを拒否する。言説上では、フランス／イタリア：「Christian roots (of Europe)」、スイス：「proud to be Christian」、オーストリア「Abendland in Christenhand / the West in Christian hands」などとして現れる。またその反動としての排除言説は、イタリア：「the defense of the Christian roots of Europe」、オランダ：「the Islamisation of Europe」「loss of identity」などが代表的である。すなわち、極右／右翼ポピュリズム政党やポピュリスト政治家は「the defence of Europe's Christian identity from the 'Islamisation' of the continent」と主張する (Forlenza, 2018; Brubaker, 2017)。

本研究の対象である AfD (や PEGIDA) の言説において、この文明的排外主義の根拠として動員されるのが、他ならぬ「Abendland」という概念である。ここにおいて「キリスト教的遺産」と「啓蒙主義的・世俗的価値」が融合する可能性を持つことになる。「Abendland」は、その歴史的地層の存在からキリスト教的文化 (遺産) と対イスラームの双方しうる概念であり、それゆえにこそ、イスラーム＝ムスリムという「文明的外部」を構築するための最強の概念として機能するのである。

第2節 現代の「Abendland」

本節では、第2章で確認した「Abendland」概念の歴史の変遷を踏まえ、現代 (特に 2010 年代以降) においてこの言葉がどのような意味内容を獲得しているかを先行研究を参照することを通じて特定する。本研究の対象であることから、特に AfD や PEGIDA にとってこの概念がいかなる「文明的排外主義」の根拠として機能しているかを論じる。

1. 冷戦後の意味転換：「反共」から「反イスラーム」へ

第2章で論じたように、戦後初期のキリスト教民主同盟 (CDU) にとって、「Abendland」はソ連共産主義 (無神論) に対抗するための「キリスト教的防波堤」であり、西側結合を正当化する普遍的な価値体系であった。しかし、Yurin (2020) が指摘するように、冷戦の終結とともにその「反共」的な求心力は失われた。かつて「反共」の旗印の下で統合されていた「Abendland」は、2000 年代以降、特に 2015 年の難民危機を経て、新たな敵としての「イスラーム」に対抗する概念として再定義された (Yurin, 2020, pp. 98-100; Yurin, 2024)。

Stübner (2021) によれば、現代の極右言説における「Abendland」は、単なる地理的区分や宗教的共同体を超え、絶滅の危機に瀕した「白人のヨーロッパ文明」を指すメタ政治的 (metapolitical) な闘争概念として機能している。ここでは、イスラーム移民の流入が、単なる人口動態の変化ではなく、西洋文明の「没落 (Untergang)」をもたらす実存的な脅威としてフレームアップされる (Stübner, 2021, pp. 4-6)。

2. 「キリスト教的世俗主義 (Christian-Secularism)」のパラドックス

現代の AfD や PEGIDA が用いる「Abendland」概念の最大の特徴は、かつて対立関係にあった「キリスト教的遺産」と「啓蒙主義的・世俗的価値」が、イスラームという共通の「外部」に対抗するために融合している点にある。

(1) 宗教と世俗のハイブリッド

AfD の基本綱領 (2016) において、ドイツの文化は「キリスト教・ユダヤ教的 (jüdisch-christlich) でヒューマニズム的な西洋 (Abendland) の伝統」に基づく」と定義されている (Häusler, 2016, p. 182)。Brubaker (2017) が「文明主義」と呼ぶこの枠組みにおいて、キリスト教は信仰告白としてではなく、世俗的なリベラル民主主義を生み出した「文明の母体」として位置づけられる。Roy (2019) は、この現象を「キリスト教のアイデンテ

イティ化」と呼び、信仰 (faith) を伴わないキリスト教的記号 (十字架、教会、クリスマスの伝統) が、ムスリムを排除するための文化的な境界線として動員されていると分析する。Roy によれば、ポピュリストたちは「キリスト教的ルーツ」を叫ぶ一方で、実際にはキリスト教の精神性や普遍主義には無関心であり、むしろそれをナショナリズムの道具として利用しているに過ぎない (Roy, 2019, pp. 15-17)。

これにより、AfD や PEGIDA は、女性の権利、政教分離、言論の自由といった近代的な成果を「我々の Abendland の価値」として独占し、それらを共有しない (とされる) イスラームを「遅れた」「野蛮な」文明として断罪する論理を構築する (Brubaker, 2017, pp. 1198-1200)。

(2) 排除のための「ユダヤ・キリスト教」

Wollenberg (2014) は、現代の右翼ポピュリズムが好んで用いる「ユダヤ・キリスト教的 (Judeo-Christian)」という修辞が、実際にはユダヤ教への親和性を示すものではなく、イスラームをヨーロッパの歴史から排除するための境界線として機能していると指摘する。かつて排除の対象であったユダヤ教を「西洋」の内部に取り込むことで、イスラームのみを「絶対的な他者」として際立たせる戦略である (Wollenberg, 2014, pp. 308-309)。

3. PEGIDA と AfD における「Abendland」の機能

先行研究に従えば、具体的な政治／社会運動において、「Abendland」は以下のように機能している。

(1) PEGIDA：街頭における「Abendland」の防衛

2014 年にドレスデンで発足した PEGIDA は、その名称 (Patriotische Europäer gegen die Islamisierung des Abendlandes) が示す通り、この概念を運動の核心に据えている。De Genova (2015) の分析によれば、PEGIDA のいう「Abendland」は、現実の多様化したヨーロッパではなく、人種的・文化的に均質な「白人のキリスト教世界」というファンタジーを指しており、彼らはイスラーム化 (Islamization) に対する抵抗を「文明的自衛権」の行使として正当化する (De Genova, 2015)。

Volk (2022) は、この「Abendland」の使用を、単なるスローガンではなく、意図的な「概念の上書き (Redescription)」戦略として分析している。PEGIDA は、ドイツの知的歴史に深く根ざした「Abendland」という用語をあえて動員することで、戦後の「リベラルな合意」に基づく欧州統合の物語に挑戦状を叩きつけた。彼らはこの概念を通じて、ヨーロッパを「普遍的な価値の共同体」から「排他的な文化的遺産の共同体」へと再定義し、自らの排外主義的な主張に歴史的・知的な正当性を付与しようとしているのである (Volk, 2022, pp. 245-247)。

Weisskircher & Berntzen (2019) は、PEGIDA の特異性を「街頭に留まり続ける (Remaining on the Streets)」点に見出している。PEGIDA は政党化することなく、毎週の「月曜デモ」を通じて街頭での可視性を維持し、反イスラーム感情とエリート批判 (Lügenpresse/嘘つきメディア) を集約するプラットフォームとして機能した。彼らの分析によれば、PEGIDA は単独で存在するのではなく、AfD という「極右政党政治 (Far-right party politics)」と相互補完的な関係にある。PEGIDA が街頭で「Abendland の危機」を叫び、過激なスローガンで世論を喚起することで、AfD はその「市民の懸念」を議会で代弁する唯一の正当な政党として振る舞うことが可能になったのである (Weisskircher & Berntzen, 2019, pp. 214-216)。

Druxes & Simpson (2016) もまた、PEGIDA が「Abendland」という用語を用いることで、人種差別的な動機を隠蔽しつつ、文化的・文明的な優位性に基づいた排除を「常識的な市民の懸念」として表出させることに成功したと論じている (Druxes & Simpson, 2016, pp. 4-6)。

(2) AfD：ナショナリズムの文明的補強

AfD にとって、「Abendland」はドイツ・ナショナリズムを補強し、正当化するための外枠として機能する。Rensmann (2018) によれば、AfD は当初の反ユーロ政党から排外主義政党へと変貌する過程で、ドイ

ツの国民的アイデンティティ (Leitkultur) を「Abendland」というより広範な文明的文脈の中に位置づけ直した⁽⁶⁾。

Yurin (2020) は、AfD のプログラムにおける「Abendland」の用法を分析し、それが CDU/CSU の伝統的な用法 (普遍的な西洋結合) とは異なり、「国民国家 (Nation)」の主権を擁護するための対抗概念として再解釈されていると指摘する。すなわち、AfD にとっての Abendland は、EU のような超国家的な統合を意味するのではなく、むしろ自律した国民国家の緩やかな連合体 (Europa der Vaterländer) を正当化するための文化的な紐帯として機能している (Yurin, 2020, pp. 103-105)⁽⁷⁾。

Yurin (2020) は、AfD の言説における「Abendland」が、CDU/CSU の伝統的な用法 (普遍的な西側結合) とは異なり、「国民国家 (Nation)」の主権を擁護するための対抗概念として再解釈されていると指摘する。すなわち、AfD にとっての Abendland は、EU のような超国家的な統合を拒絶し、彼らが掲げる「祖国ヨーロッパ (Europa der Vaterländer)」のような自律した国民国家の連合体を正当化するための、文化的な紐帯として機能しているといえる (Yurin, 2020, pp. 98-102)。

AfD の言説において、「イスラームはドイツに属さない」という主張は、単に宗教的マイノリティへの拒絶ではなく、ドイツが属する「西洋文明 (自由、法治、人権)」と「イスラーム文明 (全体主義、シャリア、女性抑圧)」との文明的な非互換性 (incompatibility) に基づいた論理的帰結として提示される (Rensmann, 2018, pp. 58-60; Havertz, 2021, pp. 89-99)。すなわち、「西洋文明」と「イスラーム文明」は、Koselleck の概念史理論における「非対称的対概念」の関係にある。

以上の分析から、現代の「Abendland」は、過去へのノスタルジーであるのみならず同時に、イスラームという特定の他者を排除するために、キリスト教と自由民主主義を恣意的に接合させた「闘争概念」、すなわち「戦闘的な文明概念」であると結論づけられる。

第 3 節 PEGIDA のディスコース分析

PEGIDA は AfD のような政党組織ではなくいわゆる街頭デモであり、公式文書が存在しないため、資料収集が困難であった。研究過程で唯一入手できた文書は、2014 年 12 月に公表された「PEGIDA の 19 項目 (Positionspapier der PEGIDA: 19 Punkte)」であった。そこでこの文書については詳細にディスコース分析は実施せず、PEGIDA が Wodak (2021) によって分析された極右／右翼ポピュリズムによる排除の政治と同様のディスコースストラテジー利用していたことを明らかにする。

以下に、全文と和訳を載せるとともに、特に注目すべき箇所は太文字に、注目すべき言葉は斜体にしている。

1. Positionspapier der PEGIDA: 19 Punkte

1. PEGIDA ist FÜR die Aufnahme von Kriegsflüchtlingen und politisch oder religiös Verfolgten. Das ist Menschenpflicht!
2. PEGIDA ist FÜR die Aufnahme des Rechtes auf und die Pflicht zur Integration ins Grundgesetz der Bundesrepublik Deutschland (bis jetzt ist da nur ein Recht auf Asyl verankert)!
3. PEGIDA ist FÜR dezentrale Unterbringung der Kriegsflüchtlinge und Verfolgten, anstatt in teilweise menschenunwürdigen Heimen!
4. PEGIDA ist FÜR einen gesamteuropäischen Verteilungsschlüssel für Flüchtlinge und eine gerechte Verteilung auf die Schultern aller EU-Mitgliedsstaaten! (Zentrale Erfassungsbehörde für Flüchtlinge,

welche dann ähnlich dem innerdeutschen, Königsteiner Schlüssel die Flüchtlinge auf die EU-Mitgliedsstaaten verteilt)

5. PEGIDA ist FÜR eine Senkung des Betreuungsschlüssels für Asylsuchende (Anzahl Flüchtlinge je Sozialarbeiter/Betreuer - derzeit ca.200:1, faktisch keine Betreuung der teils traumatisierten Menschen)
6. PEGIDA ist FÜR ein Asylantragsverfahren in Anlehnung an das holländische bzw. Schweizer Modell und bis zur Einführung dessen, FÜR eine Aufstockung der Mittel für das BAMF (Bundesamt für Migration und Flüchtlinge) um die Verfahrensdauer der Antragstellung und Bearbeitung massiv zu kürzen und eine schnellere Integration zu ermöglichen!
7. PEGIDA ist FÜR die Aufstockung der Mittel für die Polizei und GEGEN den Stellenabbau bei selbiger!
8. PEGIDA ist FÜR die Ausschöpfung und Umsetzung der vorhandenen Gesetze zum Thema Asyl und Abschiebung!
9. PEGIDA ist FÜR eine Null-Toleranz-Politik gegenüber straffällig gewordenen Asylbewerbern und Migrantinnen!
10. PEGIDA ist FÜR den Widerstand gegen eine frauenfeindliche, gewaltbetonte politische Ideologie aber nicht gegen hier lebende, sich integrierende Muslime!
11. PEGIDA ist FÜR eine Zuwanderung nach dem Vorbild der Schweiz, Australiens, Kanadas oder Südafrikas!
12. PEGIDA ist FÜR sexuelle Selbstbestimmung!
13. **PEGIDA ist FÜR die Erhaltung und den Schutz unserer *christlich-jüdisch geprägten Abendlandkultur*!**
14. PEGIDA ist FÜR die Einführung von Bürgerentscheidungen nach dem Vorbild der Schweiz!
15. PEGIDA ist GEGEN Waffenlieferungen an verfassungsfeindliche, verbotene Organisationen wie z.B. PKK
16. **PEGIDA ist GEGEN das Zulassen von Parallelgesellschaften/Parallelgerichte in unserer Mitte, wie ShariaGerichte, Sharia-Polizei, Friedensrichter usw.**
17. PEGIDA ist GEGEN dieses wahnwitzige "Gender Mainstreaming", auch oft "Genderisierung" genannt, die nahezu schon zwanghafte, politisch korrekte Geschlechtsneutralisierung unserer Sprache!
18. PEGIDA ist GEGEN Radikalismus egal ob religiös oder politisch motiviert!
19. PEGIDA ist GEGEN Hassprediger, egal welcher Religion zugehörig!

2. 日本語訳：PEGIDA の見解表明：19 項目

1. PEGIDA は、戦争難民や政治的・宗教的迫害を受けた人々の受け入れを支持します。これは人間の義務です！
2. PEGIDA は、ドイツ連邦共和国基本法に、統合の権利と義務を明記することを支持します（現在、基本法には亡命の権利のみが規定されている）。
3. PEGIDA は、戦争難民や迫害を受けた人々を、一部は非人間的な施設ではなく、分散して収容することを支持します。
4. PEGIDA は、難民の全ヨーロッパ的な配分基準と、すべての EU 加盟国による公平な負担を支持します。（難民の登録を一元的に行う機関が、ドイツ国内のケーニヒシュタインの配分方式と同様に、難民を EU 加盟国に配分する）
5. PEGIDA は、亡命希望者のケアの比率（ソーシャルワーカー/ケア担当者 1 人あたりの難民数 - 現在は約 200:1、事実上、トラウマを抱える人々へのケアは行われていない）の引き下げを支持します。
6. PEGIDA は、オランダおよびスイスのモデルに基づく亡命申請手続きを支持し、その導入までは、BAMF（連邦移民難民局）の予算を増額して、申請および処理にかかる手続き期間を大幅に短縮し、より迅速な

統合を可能にすることを支持します。

7. PEGIDA は、警察への予算増額を支持し、警察の人員削減に反対します。
8. PEGIDA は、亡命と国外追放に関する既存の法律の最大限の活用と実施を支持します。
9. PEGIDA は、犯罪を犯した亡命希望者や移民に対するゼロトレランス政策を支持します。
10. PEGIDA は、女性を敵視し、暴力を強調する政治的イデオロギーには反対ですが、ここに暮らし、統合しているイスラム教徒には反対ではありません！
11. PEGIDA は、スイス、オーストラリア、カナダ、南アフリカをモデルとした移民政策を支持します！
12. PEGIDA は、性的自己決定権を支持します！
13. PEGIDA は、**キリスト教とユダヤ教の影響を受けた Abendland 文化の維持と保護**を支持します！
14. PEGIDA は、スイスをモデルとした住民投票の導入を支持します！
15. PEGIDA は、PKK など、憲法に敵対する禁止組織への武器供給に反対しています。
16. PEGIDA は、**シャリーア裁判所、シャリーア警察、治安判事など、私たちの社会の中で、パラレル社会 / パラレル司法を容認することに反対しています。**
17. PEGIDA は、この非常識な／恥ずべき「ジェンダー主流化」、しばしば「ジェンダー化」とも呼ばれる、ほぼ強迫的な、政治的に正しい言語の性別中立化に反対です！
18. PEGIDA は、宗教的、政治的を問わず、過激主義に反対です！
19. PEGIDA は、どの宗教に属しているかを問わず、憎悪を説く者たちに反対です！

3. 分析と考察

このような PEGIDA の「政策文書」は主催者らのイデオロギーの方向性を明らかにするには有用である (Weisskircher & Berntzen, 2018, p.116)。たしかに Havertz (2021) が指摘するように PEGIDA と AfD の急進化したのは 2015 年の難民危機以降であるから、2014 年の文書を参照することはその説明にやや説得性が欠けるかもしれない。しかし、PEGIDA が難民危機以前から活動していたという事実は、彼らが欧州全体で難民の存在が顕在化する前から何らかの明確な理由によって、その名前の通りイスラム嫌悪であり、排外主義的だったことを表している (Havertz, 2021, pp. 96-98)。

ディスコース分析に従えば、PEGIDA のその特徴的な名称それ自体から、脅威のトポスと救世主のトポスが想起される。「Abendland (西洋) のイスラム化に反対する欧州愛国主義者」は、「Abendland」は我々「ヨーロッパ人」が愛すべき空間であり、その「Abendland」がイスラーム化という脅威にさらされており、我々の反対運動によってイスラム化を阻止しよう／「Abendland」を救済しようという含意がなされている。これによって「Abendland」と「ヨーロッパ人」という主語を冠することで、PEGIDA に参加する人々は、自称愛国的「ドイツ人」ではなく、愛国的「ヨーロッパ人」であるという表面的理解を可能にする。ヨーロッパのイデオロギーを持ち出すことで、偏狭なナショナリズムや人種主義という批判を回避できるのである。同時にドレスデンやドイツ国外でも PEGIDA の旗印の下で同様の運動が動員されたのである (Weisskircher & Berntzen, 2018, pp.116-118)。

「PEGIDA の 19 項目」は、一見すると第 1 項や第 10 項に見られるように、「戦争難民の受け入れ」や「統合するムスリム」を容認する姿勢を示しており、人種差別的な色彩を慎重に排除しているように見える。しかし、Weisskircher & Berntzen (2019) が指摘するように、こうした文書は運動の「穏健な顔」を演出するための戦略的側面が強い。本研究の文脈において決定的に重要なのは、第 13 項における「ユダヤ・キリスト教的西洋文化 (christlich-jüdisch geprägte Abendlandkultur) の維持」という宣言である。ここで「Abendland」は、信仰の対象ではなく、保存されるべき「文化遺産」として世俗化されている。同時に、「ユダヤ教」をあえて包含することで、彼らの敵対対象が人種 (ユダヤ人排斥) ではなく、あくまで「文明的な非互換性」を持つイスラームにあ

ることを暗に示している。

すなわち、PEGIDA は「Abendland」概念を通じた言説によってイスラームを「危険な他者」として意識する。明らかにイスラーム嫌悪であり、排外主義的な PEGIDA が運動の一環で「キリスト教とユダヤ教の影響を受けた Abendland 文化」の保護を訴えることは、「Abendland」がキリスト教の地層を有していること、世俗化の結果としてキリスト教的要素を「Abendland」という文化として意識していること、ユダヤ教までも「Abendland」文化にとりこむことを示している。そしてその結果として、「非対称的対概念」として浮かび上がってくる「イスラーム」の外敵性を意図的に強調することに繋がっている。

以上の PEGIDA の戦略はまさに、Wodak (2021) が提示したセキュリティーに訴えることで排除の主張を正当化しようとする戦略と合致する。たとえナショナリズムを志向する極右ポピュリストであっても、意図的に「ヨーロッパ」や「ヨーロッパ・アイデンティティ」を持ち出し、しばしばそれらをキリスト教的伝統／ユダヤ・キリスト教的伝統を結び付けて提示する。これと相容れない「イスラーム」の排除は、「ヨーロッパ・アイデンティティ」の強化のためであるとして正当化される (Wodak, 2021, pp. 76-81)。

よって、PEGIDA のディスコースが他国の極右／右翼ポピュリストと十分に同じストラテジーを用いていることは明らかである。さらに、こうした理解は前節で確認した現代の「Abendland」の理解に合致する。

また、第 12 項「性的自己決定権」や第 17 項「ジェンダー主流化への反対」の並列は、Brubaker (2017) のいう「文明主義」の特徴を端的に表している。彼らはリベラルな価値（性的自己決定）を「我々の文明の成果」として称揚し、それを脅かす存在としてイスラームを描く一方で、行き過ぎたリベラリズム（ジェンダー主流化）は「自然な秩序」を破壊するものとして拒絶する。ディスコース分析の観点から見れば、PEGIDA という名称自体が強力な「脅威と救済のトpos」を内包している。「Abendland（愛すべき我々の文明）」が「イスラーム化（侵略）」の危機に瀕しており、それを「愛国的な欧州人（我々）」が救わなければならない、という物語である。Volk (2022) が論じるように、「Abendland」という概念を選択したこと自体が、ナショナリズムの枠を超えた「ヨーロッパ文明の防衛戦」というメタ政治的なフレームを構築することに成功しており、これが次節で確認する AfD の「文明的排外主義」の直接的な源流となっていることは明白である。

第 4 節 AfD のディスコース分析：「Abendland」によるムスリム排除の論理

AfD の党公式文書（2016 年基本綱領、および 2019 年・2024 年欧州議会選挙綱領、2017 年・2021 年・2025 年連邦議会選挙綱領）を対象に、第 1 章で提示した「ディスコースの歴史的アプローチ (DHA)」および「概念史」のツールを用いて詳細な分析を行った。

ここでの目的は、AfD がいかにして「Abendland（西洋）」概念を「自己 (Us)」の定義として構築し、それと対置される「イスラーム (Them)」を排除するための正当化論理を組み立てているか、その言説メカニズムを解明することにある。

1. 自己表象の構築：ハイブリッドな「Abendland」と「主導文化 (Leitkultur)」

排除の論理を構築するためには、まず守られるべき「自己」が定義されなければならない。AfD の言説において、「Abendland」は単なる地理的区分ではなく、規範的な価値共同体として再定義されている。

(1) 叙述ストラテジー：キリスト教と啓蒙主義の接合

Wodak のいう「叙述ストラテジー (Predication Strategy)」の観点から見ると、AfD は「Abendland」に対して、伝統的に対立関係にあったはずの「宗教的価値」と「世俗的価値」を同時に付与 (attribute) している点特徴的である。2016 年基本綱領において、ドイツの「主導文化 (Leitkultur)」は以下のように定義される。

「第一にキリスト教の宗教的伝承、第二にルネサンスと啓蒙主義によって更新された科学・人文主義的伝統、第三に我々の法治国家の基礎であるローマ法」(2016, p. 47)

また、2024 年欧州選挙綱領においても、ヨーロッパのアイデンティティは「ギリシャ哲学、ローマ法、キリスト教、そして啓蒙主義」(2024, p. 10) によって形成されたとされる。

ここで AfD は、キリスト教を信仰 (Glaube) としてではなく、啓蒙主義や法治国家を生み出した「文化的な母体」として世俗化して提示している。これにより、「Abendland」は「自由」「人権」「男女平等」といった近代的・リベラルな価値観を内包した文明概念として構築され、後述するイスラーム排除において「我々は自由を守るために、不自由なものを排除する」というパラドキシカルな正当化を可能にしている。

(2) 歴史的地層の参照：「ドイツ文化」の上位概念としての西洋

2025 年連邦選挙綱領では、「私たちのアイデンティティは、主に文化によって決定される」(2025, p. 46) とされ、「ドイツ文化」が「キリスト教的西洋文化 (christlich-abendländische Kultur)」(2025, p. 121) の一部であることが強調される。

Koselleck の視座を用いれば、ここで「Abendland」は、過去の歴史的記憶 (時間の地層) を動員し、ドイツ・ナショナリズムに「文明的」な正統性を付与するための権威として機能している。すなわち、ドイツを守るとは、普遍的な Abendland=西洋文明を守ることと同義化される。

2. 他者表象の構築：イスラームの「脱宗教化」と「イデオロギー化」

肯定的に定義された「Abendland」に対し、イスラームはいかにして排除対象として構築されるのか。AfD は「指名ストラテジー (Nomination Strategy)」を駆使し、イスラームのカテゴリーを操作することで、憲法上の保護から逸脱させる戦略をとっている。

(1) 指名ストラテジー：「宗教」から「政治イデオロギー」へ

ドイツ基本法第 4 条は「信教の自由」を保障しているため、宗教としてのイスラームを直接排除することは憲法違反となる。この法的障壁を回避するため、AfD はイスラームを「宗教」ではなく「政治的イデオロギー」として再定義 (指名) する。

2024 年綱領は、イスラームを「単なる宗教ではなく、唯一の権威ある法秩序・社会秩序と見なす…政治的イデオロギー」(2024, pp. 12-13) と断定する。さらに 2025 年綱領では、「政治的なイスラーム (der politische Islam)」が「キリスト教的西洋文化にとって最大の脅威」(2025, p. 121) であると明記される。この「政治イデオロギー」というラベル貼りは、イスラームを「憲法に敵対する全体主義」としてフレームアップし、その排除を「宗教差別」ではなく「民主主義的法秩序の防衛」として正当化するための核心的なレトリックである。

(2) 非対称的対概念：「文明的非互換性」の構築

Koselleck のいう「非対称的対概念 (Asymmetric Counterconcepts)」の構造において、自己 (Abendland) と他者 (Islam) は対等な比較対象ではなく、善と悪、文明と野蛮という階層的対立として描かれる。

AfD の言説において、この対立は「非互換性 (Incompatibility / Unvereinbarkeit)」という語彙で表現される。

「シャリーア (イスラム法) の規定は、私たちの法秩序や価値観とは相容れない (unvereinbar)」
(2016, p. 48) 「外国の文明 (fremden Zivilisationen) からの移民は…問題を解決しない」(2025, p. 112)

ここでは、ムスリム個人の統合の可能性は否定され、イスラームという文明システムそのものが、「Abendland (自由・法・民主主義)」と原理的に共存不可能であると本質化されている。

3. 排除の正当化論理：主要なトポスの分析

Wodak の提示する「論証ストラテジー (Argumentation Strategy)」に基づき、AfD がいかなる「トポス (Topos)」を用いて具体的な排除政策を正当化しているかを分析する。

(1) 「法と権利のトポス (Topos of Law and Right)」

AfD は、イスラーム排除を「法」の論理で正当化する。2025 年綱領では、カリフ制の要求やシャリーアの適用が「自由民主主義的秩序に真っ向から反する」(2025, p. 121) とし、これらを「犯罪」として処罰することを要求する。また、一夫多妻制や児童婚を「ドイツの法秩序および公序良俗に反する」(2025, p. 124) とし、無効化を主張する。ここでは、「Abendland=法治国家」対「イスラーム=超法規的野蛮」という図式が描かれ、排除は「法の支配」を守るための必然的措置として提示される。

(2) 「脅威のトポス (Topos of Threat)」と「没落」の物語

最も頻繁に動員されるのが、イスラームを実存的脅威として描くトポスである。2019 年綱領における「歴史的規模の民族移動 (Völkerwanderung)」への警告や、2024 年綱領における「ゲットーの形成」「地元住民の追放」(2024, p. 13) という記述は、単なる治安悪化を超え、シュペングラー的な「西洋の没落 (Untergang)」の恐怖を喚起する。「数十年後に私たち自身が少数派となり、自由で多様性に富んだヨーロッパをイスラーム教に奪われる」(2024, p. 52) という記述は、Brubaker (2017) が指摘する「文明的危機 (Civilizational crisis)」の不安を煽り、予防的な排除 (国境閉鎖、送還) を「緊急避難」として正当化する。

こうしたイスラーム教やムスリムを脅威の対象とする戦略は、ディスコースそれ以外にも表れている。2019 年綱領では、「内務・法務・司法」の章の中に「イスラーム教 - ヨーロッパにとっての脅威」というセクションが入っている。2021 年及び 2024 年綱領では「イスラーム」というテーマ単体で一つの章が組まれているが、2025 年綱領では再度「(国内) 治安」の章に「イスラーム」に関する主要な記述がみられる。AfD は国内の司法や治安の文脈の中で結びつけてイスラームの脅威を記述することで、「イスラーム」を取り締まる必要がある危険な対象として描き出している。

(3) 「差異のトポス (Topos of Difference)」: エスノpluralismによる隔離の正当化

AfD は、ムスリムの排除を単なる優劣の問題としてだけでなく、「乗り越えられない文化的な差異」の問題として提示し、住み分け (Segregation) を正当化する。

● 「文化的に異質な (Kulturfremd)」というカテゴリー

2024 年欧州選挙綱領では、「文化的に異質な地域 (kulturfremden Regionen) からの大量移民」(2024, p. 16) を阻止すべきだと主張し、2025 年綱領でも「外国の文明 (fremden Zivilisationen) からの移民」(2025, p. 112) は問題を解決しないと述べる。ここで用いられているのは、「人種」ではなく「文化・文明」に基づく差異化である。彼らは「差異」を固定的なもの (immutable) と見なし、異質な文化圏の人間はドイツ社会に適応できないと本質化する。

● 「多様性の逆説」とエスノpluralism

興味深いことに、AfD はこの「差異」を肯定的に評価する文脈でも使用する。2024 年綱領では、「欧州の文化や言語の多様性は…私たちすべてのアイデンティティの源」(2024, p. 10) であり、これを「人為的に作り出された統一文化に溶解させる」(2024, p. 50) EU の試みに反対すると述べる。

AfD のこのレトリックは、アラン・ド・ブノワ (Alain de Benoist) ら、新右翼 (Nouvelle Droite / Neue Rechte) が提唱してきた「エスノpluralism (Ethnopluralism)」の概念と共鳴する。諸民族の文化的差異を肯定的に評価するがゆえに、文化の混交や同質化を拒絶し、それぞれの文化圏の分離 (住み分け) を正当化する論理である (Weiß, 2017; Häusler, 2016, pp. 199-202)。

このトポスを用いることで、AfD は自らを「人種差別主義者」ではなく、「世界の文化的多様性を守る擁護者」として位置づけ、その帰結として「ムスリムはイスラーム圏に留まるべきであり、ヨーロッパに来るべきではない」という排除の論理を、逆説的に「多文化の尊重」として正当化することに成功

している。

(4) 「ジェンダーとリベラリズムのトpos」

特筆すべきは、女性の権利や性的自己決定権といったリベラルな価値が、イスラームを攻撃するための武器として「手段化」されている点である。2025 年綱領では、「イスラム教徒の女性に対する抑圧に反対」(p. 124) し、スカーフを「女性の従属の象徴」として公共空間から追放することを求める。ここで AfD は、家族政策において伝統的な家父長制／専業主婦を支持する保守政党としての顔を隠し、「女性の権利の守護者」として振る舞う。

(5) 「経済的負担のトpos (Topos of Economic Burden)」

AfD は、イスラームや非西洋圏からの移民を排除する理由として、文化的な非互換性だけでなく、彼らが国家財政に対する「寄生的な存在」であるという経済的論理を動員する。

2025 年綱領では、「外国の文明 (fremden Zivilisationen) からの移民は…永続的に国の支援に依存した状態」(2025, p. 112) にあると断じる。また、2024 年綱領では、移民政策が「天文学的な財政負担」をもたらし、「自国民を犠牲にする政策」(2024, p. 37) であると批判する。ここでは、「我々の税金 (福祉)」は「我々の文明 (Abendland) の構成員」のために使われるべきであり、貢献しない「他者」を排除することは、差別ではなく「経済的合理性」に基づく判断であるという論理が構築されている。これは、排外主義を「福祉ショービニズム (Welfare Chauvinism)」として正当化する典型的なトposである。

(6) 「悪用のトpos (Topos of Abuse)」

移民や難民を、支援を必要とする弱者としてではなく、システムを欺く「詐欺師」として描くことで、人道的義務を無効化する戦略である。2025 年綱領は、海難救助を「悪用 (Missbrauchs) して欧州に流入する移民」(2025, p. 104) の受け入れ拒否を宣言する。また、2019 年綱領では、難民法が「大量の不正利用 (massenhaften Missbrauch)」(2019, p. 59) にさらされていると主張する。このトposは、移民を道徳的に「不正な存在」ないし「野蛮な存在」と位置づけることで、「キリスト教的隣人愛」や「人権」といった Abendland の道徳的規範を適用する必要がある対象 (排除しても良心が痛まない対象)／崇高な Abendland から排除すべき対象として再定義する機能を果たしている。

(7) 「主権とコントロールのトpos (Topos of Sovereignty and Control)」

「誰を入れるか決めるのは我々である」という主権論理を用いて、排除を国家の自律性の証として肯定するトposである。

2025 年綱領は、「移民のような存在に関わる問題は、国家レベルで自由に決定されなければなりません」(2025, p. 100) とし、国境での拒絶を「主権国家の当然の権利」と位置づける。

ここで用いられるのが「統制力の喪失 (Kontrollverlust)」(2024, p. 13) というキーワードである。AfD は、現状を「無秩序 (Chaos)」として描き、秩序を回復するためには、物理的な壁や強制送還といった強権的な排除措置が不可欠であると論証する。これは、「Abendland」を抽象的な文明としてだけでなく、物理的に防御可能な「要塞 (Festung)」として具現化する論理である。

このうち、特に(1)から(4)は Yilmaz & Morieson (2022) が「文明的ポピュリズム」の特徴とする戦略であり、リベラルな価値観を「我々の文明の成果」として独占し、それを共有しない(とされる)ムスリムを「遅れた」「野蛮な」存在として排除する論理である。

4. 小括：文明的排外主義の成立

以上の分析から、AfD のディスコースにおいて、ムスリムの排除は、人種差別的な感情論としてではなく、精緻に構築された「文明防衛」の論理として提示されていることが明らかになった。

- **定義:**

「Abendland」をキリスト教と啓蒙主義の融合した「法治・自由民主主義文明」として定義する。

- **対立:**

イスラームを宗教ではなく、この文明と両立しない「全体主義的政治イデオロギー」として規定する。

- **結論:**

したがって、文明としての民主主義・自由・法を守るためには、その敵であるイスラームを排除することが、民主主義的に正当である。

この論理構造において、「Abendland」概念は、過去の宗教的対立の記憶（時間の地層）を呼び覚ましつつ、現代のリベラルな憲法秩序をも味方につけることで、排外主義を「常識的」かつ「正義」の行いへと転化させる強力な装置として機能しているのである。

第 5 節 結論：AfD の文明的排外主義

本章では、現代ドイツの政治空間において「Abendland」概念がいかにして再召喚され、イスラームを排除するための理論的基盤として機能しているかを分析してきた。本節では、第 3 節（PEGIDA）および第 4 節（AfD）の分析結果を統合し、本研究が提示した「文明的排外主義」の枠組みにおける AfD の位置づけを確定させる。

1. PEGIDA と AfD の共鳴：街頭と議会の「分業」

ディスコース分析の結果が示した最も重要な事実は、PEGIDA と AfD の間における、驚くべき言説の連続性と相互補完性である。「PEGIDA の 19 項目」に見られた「ユダヤ・キリスト教的西洋文化の防衛」や「性的自己決定権の尊重」といったトポスは、AfD の基本綱領および選挙綱領において、より洗練された政治的言語へと翻訳され、そのまま継承されている。両者は共に、イスラームを「宗教」ではなく「政治的イデオロギー」と定義し、「リベラルな価値観（ジェンダー平等や法の支配）」を盾にしてその排除を正当化する、同一の戦略を採用している。

現実の政治プロセスにおいても、Weisskircher & Berntzen (2019) が指摘したように、両者は密接な共犯関係にある。PEGIDA は「街頭 (Streets)」において過激なスローガン（Abendland の危機、国民の抵抗）を叫び、社会の不満と恐怖を可視化する役割を果たした。一方、AfD はそれを「議会 (Parliament)」へと持ち込み、正当な政策論争として制度化する役割を担った。AfD の綱領における「Abendland」概念の多用は、PEGIDA が切り開いた言説空間なしには成立し得なかったものであり、両者は「文明的排外主義」を推進するための、異なる作動モードを持つ一つの政治的複合体であると結論づけられる。

2. 文明的排外主義政党としての確立

本研究の分析は、AfD が現代ヨーロッパにおける「文明的排外主義 (Civilizational Exclusionism)」の典型的な実践者であることを強く示唆している。

(1) イデオロギーの安定化：2017 年から 2025 年へ

Brubaker (2017) は、その先駆的な研究において、北・西ヨーロッパの右翼ポピュリズムが「ナショナリズム」から「文明主義」へとシフトしていると論じた際、当時の AfD については、まだその性格が流動的であると留保していた。実際、2017 年頃の AfD は、経済自由主義（反ユーロ）とナショナル保守主義、そして民族主義（völkisch）の間の激しい党内抗争の渦中にあり、イデオロギー的な定まりを欠いていた (Brubaker, 2017, pp. 1193-1194)。しかし、本章で分析した 2021 年、2024 年、そして 2025 年の綱領は、AfD がかつてのよう

な内部対立を乗り越え、党としての一貫したイデオロギースの基盤を確立したことを証明している。それは、もはや単なる経済的な反 EU 政党でも、復古的なナショナリスト政党でもない。彼らは、Brubaker (2017) 及び Yilmaz & Morieson (2022) が論じたフランスの国民連合 (RN) やオランダの自由党 (PVV) と同様に、「自由で世俗的なヨーロッパ文明」の擁護者を任じ、イスラームという共通の敵を設定することで国民を統合する、確固たる「文明的排外主義」政党へと進化を遂げたのである。

(2) 潜在する基盤としての「Abendland」

テキスト分析の結果、近年の綱領において「Abendland」という単語自体の出現頻度は、必ずしも高くはないことが確認された。しかし、これは同概念の重要性の低下を意味するものではない。

むしろ、第 4 節で明らかにしたように、「キリスト教」「啓蒙主義」「ローマ法」「人権」「女性の権利」といった構成要素が、イスラームとの「非互換性」を証明するために頻繁に動員されている事実は、「Abendland」という概念が、ヴァイス (2019) が指摘したような、個別の単語を超えた「メタ政治的な枠組み (Framework)」として、AfD の議論の深層に定着していることを示している (ヴァイス、2019、pp. 72-79)。

AfD が「キリスト教」を信仰の対象と見なしていたのではなく、政治的動員のための手段として利用しているという Cremer (2023) の指摘も、この「Abendland」に基づくポピュリズム的な排外主義の議論を強化する。Cremer (2023) によれば AfD のキリスト教政治は対イスラームにのみ立脚しているが、そのほかの主張については多くがキリスト教の社会政治的教義と矛盾しており、そのことも AfD 内部の人物らが認めている (Cremer, 2023, pp. 75-88)。宗教を信仰として重んじることなく、政治的動員の手段と見なす点も Brubaker (2017) と Yilmaz & Morieson (2022) の議論に合致する。

AfD にとって「Abendland」は、もはやスローガンとして叫ぶ必要すらないほど自明な、すべての排除の論理を支える「暗黙の前提」となっている。彼らの主張する「ドイツの主導文化 (Leitkultur)」や「祖国ヨーロッパ (Europa der Vaterländer)」は、いずれもこの Abendland という文明的境界線に依拠して初めて成立する概念である。

結論として、AfD の政治的成功は、そのディスコースにおいて伝統的なナショナリズムの殻を破り、「文明」というより広範で、かつリベラルな装いを凝らすことが可能な概念を戦略的に採用した点にある。彼らは「Abendland」を現代の文脈で再定義しディスコースに再文脈化させることで、衝動的な排外主義を「人種差別」から「文明防衛の正義」へと書き換えることに成功したのである。

もっとも、本結論には一つの重要な留保が必要である。本研究は、AfD がドイツ固有のナショナリズムを完全に放棄し、戦後直後に想定されたような汎ヨーロッパ的な『文明』へと全面的に同化したと断定するものではない。

彼らが掲げる「ドイツの主導文化 (Leitkultur)」や「祖国ヨーロッパ (Europa der Vaterländer)」の概念は、各国の文化的固有性を絶対視する論理に基づいている。かつて「Abendland」概念がドイツの「特別な道 (Sonderweg)」を正当化するために用いられた歴史的経緯を踏まえれば、現在の言説の根底にも、ドイツは他のヨーロッパとは異質であり、特別な使命を負った存在であるという意識が温存されている可能性は否定できない。

すなわち、AfD において「Abendland」は、他国との水平的な連帯を促す「文明的普遍性」の外殻であると同時に、ドイツの文化的優位性や独自性を際立たせるナショナルな特殊性の核を内包する両義的な概念として機能しうるのである。この文明的連帯という「外殻」とドイツ中心主義的な「核」の緊張関係が、今後どのように展開していくかは、本研究の射程を超えた、引き続き慎重な分析を要する課題である。

第 4 章 文明的排外主義によって正当化される欧州懐疑主義

前章では、AfD が「Abendland（西洋）」概念を再定義し、イスラームを「文明的・法的に非互換な他者」として排除する「文明的排外主義」の論理構造を明らかにした。続く本章の課題は、この排外主義的論理が、いかなる言説メカニズムを通じて、具体的な政治制度である「欧州連合（EU）」への批判、拒絶、そして解体論（欧州懐疑主義）へと接続されているかを解明することにある。

AfD の言説において、「イスラームへの敵対」と「EU への敵対」は、無関係な二つの政策ではない。本章では、AfD が EU を「文明の裏切り者（Traitor）」として指名し、文明を守るための唯一の手段として「主権国家への回帰」と「要塞ヨーロッパ（Festung Europa）」の構築を提示していることを論証する。これにより、彼らの欧州懐疑主義が、単なる経済的功利性やナショナリズムに基づくものではなく、「文明防衛のための必然的帰結」として正当化されている構造（文明的欧州懐疑主義）を浮き彫りにする。

第 1 節 理論的枠組み：欧州懐疑主義の類型の再検討と「文明的」転回

本章の分析に先立ち、本節では政治学における欧州懐疑主義（Euroscepticism）の主要な理論的枠組みを再検討し、本研究の分析対象である AfD のポジションを特定するための座標軸を提示する。

従来の研究において、欧州懐疑主義は「ハード／ソフト」という二分法や、経済的利害の観点から分類されてきた。しかし、現代の AfD に見られるような、EU 制度を破壊しようとしつつ「ヨーロッパ文明」の擁護者を任じる複雑な態度は、古典的な定義だけでは捉えきれない。

そこで本節では、Taggart & Szczerbiak (2002) の基礎定義、Vasilopoulou (2011) の右翼急進政党に特化した分類、そして欧州統合理論における Hooghe & Marks (2009) のポスト機能主義理論を統合し、「文明的欧州懐疑主義（Civilizational Euroscepticism）」という新たな類型を理論的に基礎づける。

1. 統合への反対強度：ソフトからハードへ

欧州懐疑主義研究の出発点となるのは、P. Taggart & A. Szczerbiak (2002) による「ハード（Hard）」と「ソフト（Soft）」の分類である。

- **ハード欧州懐疑主義（Hard Euroscepticism）：**

EU および欧州統合プロジェクトそのものに対する「原理的な反対（principled opposition）」であり、自国の EU からの離脱（withdrawal）や、反対票の投下を主張する立場である（Taggart & Szczerbiak, 2002, p. 7）。

- **ソフト欧州懐疑主義（Soft Euroscepticism）：**

欧州統合というプロジェクト自体への原理的な拒絶ではない。EU の特定の政策（通貨、移民など）への反対や、「国益（national interest）」と現在の EU の軌道が乖離しているという懸念に基づく批判的立場を指す（Taggart & Szczerbiak, 2002, p. 7）。

この枠組みを Havertz (2020) が示す AfD の歴史に適用すると、その過激化のプロセスが明確になる。2013 年結党当初の AfD（Lucke 時代）は、共通通貨ユーロには反対しつつも単一市場や EU の枠組み自体は肯定していたため、典型的な「ソフト」に位置づけられる。しかし、第 3 章で確認した通り、2019 年時点では「DEXIT（ドイツの離脱）」を主張しており、現在の AfD（2024 年/2025 年綱領）は、EU を「改革不可能」とし、「EU の解体と再編」を選択肢に入れている。これは明確に「ハード」への移行を示している（Havertz, 2021, pp. 34-51）。

2. 右翼急進政党の特異性：「原理」と「実践」の分離

しかし、「ハード／ソフト」の二分法だけでは、AfD が掲げる「祖国ヨーロッパ」や「要塞ヨーロッパ」といった親欧州的なスローガンと、激しい反 EU 姿勢との共存を説明することは困難である。ここで有効なのが、S. Vasilopoulou (2011) による右翼急進政党 (Radical Right) に特化した分析枠組みである。

Vasilopoulou は、欧州統合への態度を「原理 (Principle)」「実践 (Practice)」「未来 (Future)」の 3 つの次元に分解し、以下の 3 パターンを提示した (Vasilopoulou, 2011, pp. 226-230; 近藤、2018, pp. 122-125)。

- **拒絶型 (Rejectionist) :**

統合の「原理 (協力自体)」「実践 (現状の EU)」「未来 (統合深化)」のすべてを拒絶する。

- **条件付き (Conditional) :**

統合の「原理」は支持する (欧州諸国の協力は善とする) が、現在の「実践 (EU の現状)」と「未来 (統合深化)」は拒絶する。国家主権を維持した緩やかな連合体を志向する。

- **妥協型 (Compromising) :**

「原理」と「実践」は受け入れるが、「未来」の統合深化には反対する。

この分類に従えば、AfD の欧州懐疑主義は「条件付き」から「拒絶型」への移行期、あるいはその混合形態として理解できる。重要なのは、AfD が「欧州協力の原理 (文明的連帯)」を肯定しつつ、「EU という実践 (リベラルな制度)」を徹底的に拒絶しているという点である。Vasilopoulou の視座は、AfD が「反ヨーロッパ (Anti-Europe)」ではなく、リベラルではない「もう一つのヨーロッパ (Alternative Europe)」を求めているという、本研究の「文明的欧州懐疑主義」の定義を理論的に補強するものである。

3. 対立の源泉：ポスト機能主義とアイデンティティ政治

では、なぜ AfD において、経済的合理性 (単一市場の利益) よりも、こうした文明的・文化的な対立が優先されるのか。L. Hooghe と G. Marks (2009) が提唱した「ポスト機能主義 (Postfunctionalism)」理論は、このメカニズムを鮮やかに説明する。

- **許容的合意から制約的対立へ:**

Hooghe & Marks は、欧州統合がエリート主導の「許容的合意 (Permissive Consensus)」の時代を終え、大衆による「制約的対立 (Constraining Dissensus)」の時代に入ったと論じた。統合が各国の国内政治において争点化 (politicization) された結果、政府は世論の制約を受けるようになった (Hooghe & Marks, 2009, pp. 5-6)。

- **アイデンティティの論理:**

彼らのモデルにおいて、統合への支持／不支持を決定する要因は、経済的な「功利主義 (Utilitarianism)」から、文化的な「アイデンティティ (Identity)」へとシフトしている。特に、ナショナルなアイデンティティを「排他的 (exclusive)」に捉える人々にとって、欧州統合は異質な他者の侵入を許す脅威として映る (Hooghe & Marks, 2009, pp. 12-13)。

本研究の対象である AfD の「Abendland」言説は、まさに Hooghe & Marks が指摘した「アイデンティティの論理」による政治的動員の極致である。AfD はその台頭の過程で、ユーロ危機 (経済) から難民危機 (文明) へと争点の重心を移すことで、功利主義的な計算を超えた、情動的で強固な「制約的対立 (Dissensus)」を作り出すことに成功したのである。

4. 結論：文明的欧州懐疑主義の理論的位置づけ

以上の 3 つの理論的支柱を統合することで、本研究が提唱する「文明的欧州懐疑主義」は、以下のように位置

づけられる。

- **強度の次元 (Taggart & Szczerbiak) :**

EU 解体をも辞さない「ハード」の懐疑主義である。

- **対象の次元 (Vasilopoulou) :**

「EU という政治制度 (実践)」は拒絶するが、「Abendland という文化共同体 (原理)」は擁護するという二重構造 (条件付きアプローチの過激化) を持つ。

- **動機の次元 (Hooghe & Marks) :**

その拒絶の駆動力は、経済的損得よりも、排他的な「アイデンティティ (文明)」の防衛にある。

ただし、AfD は移民難民の受け入れによる経済的・財政的負担についても多分に言及しており、この点については留意が必要である。本研究においては一貫して概念としての「Abendland」を扱い、これが内面的要素としての政治的動員に利用されてきた歴史を確認した。そのため、ここでも現代における政治的動員概念としての「Abendland」に注目する。

次節からの分析では、この理論的枠組みを前提とし、AfD がいかにして「文明 (原理)」を守るために「EU (実践)」を破壊するという論理を、具体的な言説において構築しているかを検証する。

第 2 節 「裏切り者」としての EU : 文明の内部崩壊

第 3 章で確認したように、AfD は自らを「Abendland (西洋)」の守護者として位置づけている。では、本来「西洋」の政治的結晶であるはずの欧州連合 (EU) は、彼らの言説においていかなる位置を与えられているのか。本節では、DHA の分析枠組みを用い、AfD が EU に対して適用する「指名・叙述ストラテジー」と、その批判を正当化する「論証ストラテジー (トポス)」を分析する。これにより、AfD が EU を「改革すべき対象」としてではなく、文明を内部から崩壊させる「裏切り者 (Traitor)」として構築し、制度的な破壊 (解体・離脱) を正当化している論理構造を明らかにする。

1. 指名・叙述ストラテジー : 「非民主的組織」としての EU

まず、AfD が EU というアクターをどのように呼び (指名)、どのような属性を与えているか (叙述) を分析する。ここでは、「真のヨーロッパ」と「制度としての EU」を切り離すための徹底的な「分離のレトリック」が用いられている。

(1) 「非民主的な構造物」への指名

AfD は一貫して、EU から「民主的な正統性」を剥奪する指名戦略を採用している。2019 年および 2024 年の欧州選挙綱領において、EU は繰り返し「非民主的な構造物 (undemokratisches Konstrukt) (2019, p. 11; 2024, p. 10) と指名される。さらに 2016 年基本綱領では、EU を支配するエリートを「政治カルテル (politisches Kartell)」や「秘密の主権者 (Heimlicher Souverän) (2016, p. 8) と呼び、彼らが国民から権力を篡奪していると叙述する。この指名戦略により、EU は「ヨーロッパ市民の代表」ではなく、国民国家の頭越しに支配を行使する「正体不明の外部権力」として位置づけられる。

(2) 「官僚主義的リヴァイアサン」としての叙述

EU には、否定的な属性 (Predication) が集中的に付与される。2024 年綱領では、EU が「不透明で統制の取れていない官僚機構 (intransparenten, nicht kontrollierten Bürokratie) (2024, p. 10) によって支配されていると叙述され、2019 年綱領では、その規制が競争を「絞め殺している (erdrosselt)」と表現される。ここで構築されるのは、EU = 「生命力のない、冷徹な機械 (Zivilisation)」対 ドイツ = 「有機的な文化共同体 (Kultur)」

という、シュペングラー的な対立図式である。AfD は EU を、Abendland の精神的遺産（自由・民主主義）を継承する存在ではなく、それを窒息させる「官僚主義的組織」として描くことで、EU への敵対心を文明防衛の文脈に位置づけている。

2. 論証ストラテジー (1)：文明破壊のトpos

AfD の EU 批判を「文明的欧州懐疑主義」として特徴づける決定的な要素は、EU が「Abendland の文化」を意図的に破壊しようとしているという「陰謀と背信の論理」である。

(1) 「溶解のトpos (Topos of Dissolution)」

AfD は、EU の文化政策を「多様性の破壊」として攻撃する。2024 年欧州選挙綱領において、以下の記述は決定的である。

「EU の文化政策は……この欧州の多様性を人為的に作り出された統一文化に溶解させることを目標としている」(2024, p. 50)

ここで用いられているのは、「溶解 (auflösen)」のメタファーである。AfD は、EU が推進する「インクルージョン」や「多様性 (Diversity)」といったリベラルな価値観を、各国の固有の伝統 (Abendland の真の姿) を破壊し、均質で根無し「人工的な文化」へと改造するためのイデオロギー装置であると見なす。このトposにより、EU は単なる「調整機関」ではなく、ドイツのアイデンティティを抹消しようとする「実存的な侵略者」へと変貌する。

(2) 「トロイの木馬」としての EU

さらに、この「溶解」は、外部からの敵 (イスラーム) を招き入れる行為とリンクされる。2016 年綱領において、EU エリートは「過去数十年の誤った発展 (Fehlentwicklungen)」の責任者とされ (2016, p. 8)、2024 年綱領では、彼らが「欧州文明を存亡の危機に陥れる難民・移民政策を推進している」(2016, p. 37) と断罪される。ここでは、EU は境界を内側から解放する「裏切り者」として機能している。AfD の論理において、イスラーム化の脅威 (第 3 章で分析) と EU の統合深化は、共犯関係にある。EU がシェンゲン協定によって国境を撤廃し、多文化主義を強制することが、イスラームの侵入を可能にしているという因果関係が構築されるのである。すなわち、EU は「内なる脅威」として描かれる。

3. 論証ストラテジー (2)：失敗と被害のトpos

最後に、この文明的背信の結果として生じた現実を、AfD はいかにして正当化根拠として利用しているか。

(1) 「青天井の権利 (Schönwetterrecht)」のトpos

2015 年の難民危機における EU の対応について、AfD は「失敗のトpos (Topos of Failure)」を用いる。2019 年および 2025 年綱領では、EU 共通庇護制度 (GEAS) を「完全に失敗 (vollständig gescheitert)」したと断じ、EU 法は危機時に誰も守らない「青天井の権利」に過ぎないと揶揄する (2019, p. 37; 2025, p. 102)。このレトリックは、EU の「法の支配」という正統性を無効化する。「EU は危機において我々 (Abendland) を守らなかった」という事実は、ドイツが自らの手で国境を守る (主権回復) ための、道徳的かつ実存的な正当性を提供する。

(2) 被害者の視点化 (Perspectivization)

Wodak(2021)のいう「観点化 (Perspectivization)」において、AfD は常に「犠牲者」の立場を採用する。2025 年綱領では、ドイツが EU の失敗により「統制力を喪失 (Kontrollverlust)」し、他国から「アウトサイダー」として扱われ、財政的にも搾取されている (移転連合) と描かれる (2025, pp. 14-15)。「我々は EU によって文明的にも経済的にも搾取されている」という被害者意識の構築は、EU からの離脱 (DEXIT) や解体を、攻撃的な行為ではなく、正当な「自己防衛 (Self-Defense)」として再定義するために不可欠な言説操作である。

4. 小括：制度への攻撃による文明の救済

以上の分析から、AfD における「裏切り者としての EU」の構築プロセスが明らかになった。

- 指名・叙述:

EU を「非民主的」「人工的」「官僚的」な存在として定義し、有機的な「Abendland（ドイツを含む欧州諸国民）」と対置させる。

- 論証（背信）:

EU が多文化主義を通じて各国の固有性を「溶解」させ、イスラームという敵を招き入れていると論証する。

- 論証（失敗）:

危機において EU は機能不全に陥ったため、もはや従う義務はないと結論づける。

この言説構造において、EU 批判は単なる政策論争を超え、「文明の内部崩壊を食い止めるための闘争」へと昇華される。AfD にとって、EU を破壊／改革することは、ヨーロッパを破壊することではなく、逆に「裏切り者」を排除し、真の「Abendland」を救済するための義務となるのである。

第 3 節 「祖国ヨーロッパ」による救済：主権の文明的機能

前節で確認した通り、AfD は EU を文明を内部から崩壊させる「裏切り者」として指名した。この危機的状況に対する「救済策」として提示されるのが、国民国家の主権回復である。本節では、AfD の対案的ビジョンである「祖国ヨーロッパ（Europa der Vaterländer）」の概念分析を行う。DHA の視座を用いることで、彼らが「主権（Sovereignty）」という政治的概念にいかなる意味を付与し（叙述戦略）、それをいかなる論理で正当化しているか（論証戦略）を解明する。AfD において、主権とは単なる統治の権限ではなく、Abendland の精神的・文化的遺産を保持しうる唯一の容器として再定義されている。

1. 指名・叙述ストラテジー：「祖国」と「人工物」の対立

AfD は、自らが目指す欧州秩序を定義するために、「祖国ヨーロッパ（Europa der Vaterländer）」あるいは「欧州諸国連合（Bund europäischer Nationen）」という指名ストラテジーを一貫して採用している（2025, p. 86; 2024, p. 10）。

ここで注目すべきは、Koselleck のいう「非対称的対概念」の構造である。AfD は、「国民国家（Nation/Vaterland）」に対して、「有機的」「歴史的」「民主的」という肯定的な属性（Predication）を付与する一方で、EU（またはヨーロッパ合衆国）に対しては、「人工的」「官僚的」「非民主的」という否定的な属性を付与している。2024 年欧州選挙綱領は、「欧州の文化や言語の多様性は、何世紀にもわたる歴史的発展の結果」であり、それが「アイデンティティの源」とであると述べる。対して、EU による統合深化は、この有機的な歴史的生成物を「人為的に」破壊する行為として位置づけられる。この叙述戦略により、国民国家への回帰は、過去への退行（ナショナリズム）ではなく、歴史的に形成された正統な「ヨーロッパの多様性」を守るための、文明的要請として正当化される。

2. 論証ストラテジー（1）：デモスの不在と民主主義のトポス

AfD が主権回復を正当化するために用いる最も強力な論理は、「民主主義のトポス（Topos of Democracy）」である。しかし、ここでの民主主義は、特定の文明論的条件付けがなされている。

2024 年綱領において、AfD は「ヨーロッパ国民（europäisches Staatsvolk）は存在しない」と断言し、したが

って「ヨーロッパ・アイデンティティ」も幻想であると論じる (2024, p. 10)。彼らの論理によれば、民主主義の不可欠な前提である「民意 (General Will)」は、共通の言語、文化、歴史を共有する「国民 (Volk)」という枠組みの中でしか成立しない。したがって、共通の「デモス (人民)」を持たない EU が権力を行使することは、構造的に非民主的な支配とならざるを得ない。AfD はこの「デモスの不在」を根拠として、「民主的な憲法を持つ国民国家においてのみ、国民主権と市民の基本的権利が守られる」(2019, p. 11) と結論づける。この論証において、国家主権の回復は、単なる権限の奪還ではなく、Abendland の核心的価値である「民主主義」を、非民主的な EU から救出するための聖なる闘争として意味づけられる。

3. 論証ストラテジー (2) : 文明防衛の実行権

第3章で論じた「文明的排外主義」を実行に移す段階において、主権は「決定権」としての核心的機能を果たす。ここで用いられるのは、「主権のトポス (Topos of Sovereignty)」である。

2025 年連邦選挙綱領は、「移民のような存在に関わる問題は、国家レベルで自由に決定されなければならない」とし、「ドイツに入国を許可するかどうかは、ドイツだけが決定する」と宣言する (2025, p. 100)。この主張は、一見すると法的な管轄権争いに見えるが、文脈を考慮すれば「文明的自衛権」の行使宣言である。AfD にとって、EU の共通政策 (難民割当など) に従うことは、文明的に異質な他者 (イスラーム) の侵入を拒めない状態、すなわち「自己決定権の喪失」を意味する。逆に言えば、「主権」を持つことだけが、国境を物理的に管理し、異質な文明の流入を阻止する「排除の実行」を可能にする。したがって、主権国家への回帰は、政治的な自律のためだけでなく、「Abendland」をイスラーム化による没落から物理的に防衛するための、唯一の実効的な手段として位置づけられる。

4. 小括 : 主権による文明の救済

以上の分析から、AfD の「祖国ヨーロッパ (Europa der Vaterländer)」構想における主権の機能が明らかになった。

第一に、主権国家は、EU という「人工的」な怪物から、ヨーロッパ本来の「有機的」な多様性を守るためのシェルターとして機能する。第二に、主権国家は、デモス (国民) の存在しない EU では不可能な「民主主義」を維持するための唯一の正統な政治単位として機能する。第三に、そして最も重要なことに、主権国家は、自らの意思で国境を閉じ、異質な文明 (イスラーム) を排除することができる唯一のアクターとして機能する。

結論として、AfD の欧州懐疑主義において、「国家主権」はそれ自体が自己目的化されたナショナリズムではない。それは、危機に瀕した「Abendland」を、内部の裏切り者 (EU) と外部の敵 (イスラーム) の双方から救済し、防衛するために不可欠な「文明的武器」として再文脈化されているのである。

第4節 「要塞ヨーロッパ」: 文明境界の物理的具現化

前節までにおいて、AfD が EU を「文明の裏切り者」と断罪し、国家主権を「文明防衛の権利」として再定義するプロセスを確認した。この文明的排外主義が、具体的な空間政策として結晶化したのが「要塞ヨーロッパ (Festung Europa)」の構想である。本節では、AfD がいかにかつてナチスのプロパガンダ用語であった、あるいはリベラル派からの批判用語であった「要塞」という言葉を肯定的な政治目標として「再文脈化」し、国境の物理的封鎖を文明存続のための道徳的義務として論証しているかを分析する。

1. 指名・再文脈化ストラテジー: 肯定的な「要塞」の構築

AfD の言説において最も注目すべき転換は、「要塞ヨーロッパ (Festung Europa)」という用語の戦略的な再利用 (Recontextualization) である。2024 年欧州選挙綱領において、AfD はこの言葉を見出しとして掲げ、「物理的な障壁の設置、技術的な監視、国境警備隊の投入」(2024, p. 11) を公然と要求している。

DHA の観点から見れば、これは「指名ストラテジー」の極めて意識的な運用である。「要塞」というメタファーは、内部に守られるべき「貴重なもの (Abendland の自由と繁栄)」が存在し、外部にはそれを脅かす「略奪者 (野蛮な他者)」が存在するという、二元論的な世界観を即座に喚起する。AfD は、この言葉を「閉鎖性」や「非人道性」の象徴としてではなく、「安全性」と「秩序」の象徴として再定義している。彼らの文脈において、要塞化とは孤立することではなく、混沌とした外部世界 (イスラーム圏やアフリカ) から、文明の聖域を免疫化 (immunize) するための必須条件として位置づけられる。

2. 論証ストラテジー (1): ハイブリッド戦争と「脅威のトポス」

国境の軍事化や物理的封鎖を正当化するために、AfD は「脅威のトポス (Topos of Threat)」を軍事的なレベルへと引き上げている。

2025 年連邦選挙綱領において、移民の動きは単なる人道危機ではなく、「ハイブリッド戦争の手段や政治的脅迫の目的で意図的に利用されてきた」(2025, p. 18) と論証される。ここで移民は、助けを求める「人間」から、敵対的な国家や勢力が放つ「兵器」へと叙述 (Predication) が書き換えられている。この「戦争」のメタファーは、通常の法執行 (警察活動) を超えた、例外的な措置を正当化する。2016 年基本綱領ですでに言及されていた「連邦軍の動員」や「防護フェンスの設置」(2016, p. 27)、あるいは 2024 年綱領における「海難救助の拒否」や「押し返し (Pushback)」といった強硬策は、もはや人権侵害ではなく、侵略に対する「正当防衛」として位置づけられることになる。

3. 論証ストラテジー (2): 統制喪失と「主権のトポス」

AfD の国境言説を貫くもう一つの核心的な論理は、「統制 (Control)」への執着である。2025 年綱領は、現状を「ドイツの統制力の喪失 (Kontrollverlust) が恒常的な状態」(2025, p. 14) にあると描き、これを国家としての死に至る病として提示する。

ここで動員されるのは、「主権のトポス (Topos of Sovereignty)」である。AfD の論理によれば、主権の本質とは「誰が入国するかを決定する能力」に他ならない。「要塞」の構築は、EU (Frontex) という信頼できない代理人に委ねていた「門番」の機能を、国民国家が自らの手に取り戻す行為として意味づけられる。2024 年綱領における「ヨーロッパはここから始まり、ヨーロッパが誰にアクセスを許可するかを決定することを、はっきりと明らかにする」(2024, p. 17) という宣言は、物理的な壁が単なる障害物ではなく、文明的な「自己決定権」の物理的表現であることを示している。

4. 小括: 文明の「外郭」としての国境

以上の分析から、AfD における「要塞ヨーロッパ」の機能が明らかになった。それは単なる移民抑制政策ではなく、第 3 章で定義された「Abendland」という精神的共同体に、物理的な輪郭を与える試みである。

- **象徴機能:**

「要塞」という言葉を肯定的に再文脈化し、排除を「聖域の防衛」として道德化する。

- **軍事機能:**

移民を「ハイブリッド戦争の兵器」と見なすことで、人権規範を無効化し、軍事的な遮断を正当化する。

- **主権機能:**

物理的な壁の構築を通じて、失われた国家の統制力（主権）を可視化し、回復する。

結論として、AfD にとっての国境（要塞）は、国家という領域を守るための「外郭」である。彼らの欧州懐疑主義が目指すのは、EU によって透過的になってしまったこの皮膚を、再び不浸透なものへと硬化させ、異質な文明の侵入を物理的に遮断することにある。この「要塞」の完成こそが、彼らにとっての文明的欧州懐疑主義の最終的な到達点となるのである。

第 5 節 結論：文明的欧州懐疑主義の論理構造

本章では、AfD のディスコース分析を通じて、彼らの排外主義がいかにして EU 批判へと接続されているかを検証してきた。結論として、本節では「文明的排外主義」から「文明的欧州懐疑主義」へと至る論理的接続のプロセスを総括し、本研究が提示する新たな欧州懐疑主義モデルの特質と限界を明示する。

1. 接続の論理：三項対立構造の完成

AfD の言説において、ムスリム排除（排外主義）と EU 批判（懐疑主義）は、別個の政策領域ではなく、一つの不可分な物語として統合されている。その接続の論理は、以下の「三項対立構造」によって説明できる。

- **守るべき自己（Abendland）：**

キリスト教的伝統と啓蒙主義的リベラリズム（自由・民主主義・法の支配）のハイブリッドとして定義される文明的共同体。

- **排除すべき敵（Islam）：**

この文明と原理的に非互換（incompatible）であり、その存在自体が「没落」をもたらす全体主義的な外部脅威。

- **断罪すべき裏切り者（EU）：**

多文化主義と国境開放を通じて「敵」の侵入を手引きし、各国の固有性を溶解させる内部の加担者。

この構造において、AfD の欧州懐疑主義は、単なる「反 EU」ではなく、「裏切り者（EU）を排除することで、文明（Abendland）を敵（Islam）から救済する」という論理的帰結として導き出される。彼らにとって国家主権の回復や国境の要塞化は、ナショナリズムの復権である以上に、EU によって無効化された「文明的免疫システム」を再起動させるための緊急避難措置として正当化されるのである。

2. 既存の欧州懐疑主義との相違点

本研究が提唱する「文明的欧州懐疑主義（Civilizational Euroscepticism）」は、以下の点において、従来論じられてきた欧州懐疑主義の類型とは決定的に異なる特徴を持つ。

(1) 功利主義から実存的闘争へ

従来の「功利主義的懐疑主義」（Hooghe & Marks）が、EU を「経済的なコスト（負担）」として批判したのに対し、文明的欧州懐疑主義は、EU を「文明的な死（没落）」をもたらす脅威として批判する。ここでは、争点が「損得」から「生死」へと移行しており、それゆえに妥協の余地がない「ハード」の拒絶を生み出している。

(2) 「親ヨーロッパ」ゆえの「反 EU」

従来の「主権重視型懐疑主義」が、国民国家を至上のものとしてヨーロッパ統合そのものを否定する傾向があったのに対し、AfD の文明的懐疑主義は、「真のヨーロッパ（Abendland）」を擁護するがゆえに「現在の EU」を拒絶するという逆説的な構造を持つ。Vasilopoulou (2011) の枠組みを用いれば、彼らは「ヨーロッパ協力

の原理」は肯定しつつ、その「実践 (EU)」を全否定している。この「我々こそが真のヨーロッパ人である」という自己規定は、彼らが他国の右翼政党 (RN や Fidesz) と「祖国ヨーロッパ」の名の下に連帯することを可能にしている点でも、孤立主義的なナショナリズムとは一線を画す。

(3) リベラル価値の動員

最も際立った特徴は、EU 批判のために「民主主義」「法の支配」「女性の権利」といったリベラルな価値観が動員されている点である。従来、EU 側が独占していたこれらの規範を、AfD は「EU こそが民主主義 (デモス) を欠き、女性を脅かすイスラームを容認している」と逆手に取って批判する。これは、リベラリズムを文明防衛の武器として転用する、高度に洗練された言説戦略である。

3. 学術的留保

最後に、本研究の結論に対して、慎重な学術的留保を付しておく必要がある。

第一に、「文明」の戦略的利用の可能性である。AfD が掲げる「Abendland」や「エスノブルリズム」といった洗練された概念は、実際には古典的な人種主義 (Racism) やドイツ民族至上主義 (Völkisch nationalism) を隠蔽し、中道層の支持を獲得するための「上塗り (Varnish)」に過ぎない可能性がある。本研究はディスコース (言説) の表層的な論理構造を解明したが、支持者層の実質的な動機が「文明防衛」にあるのか、それとも原初的な「ゼノフォビア」にあるのかについては、別途、計量的な意識調査による検証が求められる。

第二に、ドイツ固有の文脈である。AfD の「文明的欧州懐疑主義」は、ナチズムの過去を持つドイツにおいて「あからさまなナショナリズム」がタブー視されてきたという特殊事情が生み出した産物である可能性がある。ヴァイス (2019) が指摘したように、実際 AfD は極右勢力との繋がりが深く、ディスコースのストラテジーや主張の背景に影響を及ぼしている可能性は否定できない。このモデルが、歴史的背景の異なる他の欧州諸国の右翼ポピュリズム (例えばイタリアやポーランド) にも同様に適用可能か否かは、比較研究による検証が必要である。

以上の留保はあるものの、AfD が「文明」というメタ政治的な概念を導入することで、欧州懐疑主義の質を転換させ、新たな動員回路を切り開いたことは疑いようのない事実である。本研究が提示した論理モデルは、混迷を深める欧州統合の行方を占う上で、無視できない視座を提供するものである。

結論

本研究は、現代ドイツの極右／右翼ポピュリズム政党「ドイツのための選択肢 (AfD)」が、かつて欧州統合の精神的支柱であった「Abendland (西洋)」という概念をいかにして再定義し、それをイスラーム排除と EU 批判のための政治的武器として転用しているかを解明することを目的としてきた。Koselleck の概念史と Wodak の批判的言説分析 (DHA) を統合したアプローチによって得られた知見は、AfD の欧州懐疑主義が、単なる経済的な利害対立や、一国中心的なナショナリズムへの回帰にとどまらない、より複雑で深層的な論理構造を持っていることを明らかにしている。

以下に、本研究のリサーチ・クエスションに対する回答を総括し、その学術的意義と今後の展望を提示する。

第 1 節 研究の総括

1. RQ1 への回答：文明的排外主義の構築メカニズム

AfD はいかにして「Abendland」を用いて排外主義を構築したのか。分析の結果、AfD は「Abendland」概念に堆積した歴史的な「時間の地層 (Zeitschichten)」の中から、特定の層を選択的に動員していることが判明した。彼らは、戦後 CDU が確立した「親西側・親民主主義」的な外見を維持しつつ、その中身を世俗化された「文化遺産」へと変質させた。ここで構築された「文明的排外主義」の特徴は、キリスト教を信仰対象としてではなく、自由、法、男女平等といったリベラルな価値観を含む世俗化された「文明」として定義する点にある。これにより、AfD はイスラームを単なる異教徒としてではなく、リベラルな秩序と両立しない「全体主義的な政治イデオロギー」として他者化することに成功した。この「文明的非互換性 (Incompatibility)」の論理こそが、人種差別の批判を回避しつつ、ムスリムの排除を「自由民主主義を守るための正当防衛」として正当化するメカニズムの核心である。

2. RQ2 への回答：文明的欧州懐疑主義への接続論理

この排外主義は、いかにして EU 批判へと転化されたのか。本研究は、AfD の言説において、ムスリム排除と EU 批判が「三項対立構造」によって強固に結合されていることを明らかにした。すなわち、「守るべき自己 (Abendland)」、「排除すべき敵 (Islam)」、そして敵の侵入を手引きする「裏切り者 (EU)」という構造である。AfD にとって、EU の多文化主義や国境開放政策は、各国の文化的固有性を「溶解」させ、文明の没落を招く背信行為として指弾される。したがって、彼らの主張する「国家主権の回復」や「要塞ヨーロッパ」の構築は、行政権限の奪還にとどまらず、機能不全に陥った EU に代わって文明を防衛するための、唯一残された救済手段として意味づけられる。結論として、AfD の欧州懐疑主義は、「真のヨーロッパ (Abendland 文明)」を守るためにこそ、「現在のヨーロッパ (EU)」を破壊／改革しなければならないという、逆説的かつ実存的な「文明的欧州懐疑主義」として定義される。

第 2 節 本研究の意義

本研究が提示した「文明的排外主義」及び「文明的欧州懐疑主義」のモデルは、現代欧州政治の理解において以下の三つの意義を持つ。

第一に、欧州懐疑主義研究における「功利主義」と「アイデンティティ」の二項対立を乗り越える視座を提供した点である。AfD の事例は、経済的損得 (功利主義) を超えた「アイデンティティ」の闘争が、いかにして制度的な破壊や拒絶 (ハード懐疑主義) へと結びつくかを示している。彼らは「ヨーロッパ」という理念を拒絶しているのではなく、その定義権をめぐる EU エリートと闘争しているのである。

第二に、現代の排外主義が「リベラリズム」を包摂する形で進化している事実を実証した点である。AfD が女性の権利や世俗法を盾にイスラームを攻撃する戦略は、民主主義的価値観そのものが、文脈によっては特定の他者を排除するための鋭利な凶器となりうることを示唆している。一方で多くの先行研究が指摘するように彼らはしばしば反自由主義的主張を行う。これは、自由民主主義が抱えるパラドックスに対する深刻な警鐘である。

第三に、欧州統合史において「Abendland」概念の意味が転回していることを明らかにした点である。既に先行研究において「Abendland」が欧州統合を推進するスローガンであったことは明らかとなっていた。本研究はこの事実を前提に現代における「Abendland」がむしろ現状の欧州統合に疑義を持つ政治家によって欧州懐疑主義のための概念ないし言説上のキーワードとして機能していることを明らかにした。現代の「Abendland」は現状の欧州統合を否定する概念である。

第3節 限界と今後の展望

最後に各章の結論では指摘できなかった本研究の学術的限界について指摘する。

第一に、本研究は分析対象をドイツの AfD にのみ限定していることである。「文明的排外主義」と「文明的欧州懐疑主義」の議論のベースとした先行研究はいずれも複数の国家の政党を包括的に分析していた。したがってたしかに本研究が対象にした AfD と近似した主張構造を他国の極右／右翼ポピュリズム政党も採用していると推測できるが、本研究の2つの主張をヨーロッパ規模の現象として理解し説明するにはさらなる研究が必要である。

第二に、本研究が採用している定性的手法の限界である。ディスコースの分析を定性的手法にのみ依拠しているため、分析する者の主観性を排除することができない。

第三に、ディスコース供給側の真の意図が不明なことである。少なくともドイツにおいては戦後期と比べ、現代において単語としての「Abendland」は頻出のキーワードではなく、PEGIDA の例を除けば、強調されるスローガンでもない。そのため、ディスコースを提供するアクターの政党が、「文明的排外主義」「文明的欧州懐疑主義」というロジックをどの程度意識的に実施しているのかは依然として不明である。

それでも、本研究によって一応のモデル化を試みた「文明的排外主義」と「文明的欧州懐疑主義」は、AfD 以外の政党にも適用し観測することが十分に可能であるように見える。本研究の成果を土台として、今後同様の枠組みで他の政党のディスコースや主張を理解する試みに繋がる可能性があるだろう。

ヨーロッパは今、「統合による平和」という戦後の大前提が崩れ、「文明の防衛」という新たな、しかし古色蒼然とした論理によって分断されようとしている。「Abendland」という概念の行方は、ドイツ、そしてヨーロッパがこれからどこへ向かおうとしているのかを指し示す風向計と言えるだろう。

参考文献一覧

※本報告書内で引用していないものも含む。

分析対象資料（一次資料）

AfD (2013). *Wahlprogramm Alternative für Deutschland. : Wahlprogramm Parteitagebeschluss vom 14.04.2013.*

AfD (2014). *Mut zu Deutschland. Für ein Europa der Vielfalt. : Programm der Alternative für Deutschland (AfD) für die Wahl zum Europäischen Parlament am 25. Mai 2014.*

AfD (2016). *PROGRAMM FÜR DEUTSCHLAND. : Das Grundsatzprogramm der Alternative für Deutschland.*

AfD (2017). *PROGRAMM FÜR DEUTSCHLAND : Wahlprogramm der Alternative für Deutschland für die Wahl zum Deutschen Bundestag am 24. September 2017.*

AfD (2019). *EUROPAWAHLPROGRAMM : Programm der Alternative für Deutschland für die Wahl zum 9. Europäischen Parlament 2019.*

AfD (2021). *Deutschland. Aber normal. : Programm der Alternative für Deutschland für die Wahl zum 20. Deutschen Bundestag.*

AfD (2024). *EUROPAWAHL PROGRAMM 2024 : Programm der Alternative für Deutschland für die Wahl zum 10. Europäischen Parlament.*

AfD (2025). *ZEIT FÜR DEUTSCHLAND. : PROGRAMM DER ALTERNATIVE FÜR DEUTSCHLAND FÜR DIE WAHL ZUM 21. DEUTSCHEN BUNDESTAG.*

PEGIDA (2014). *Positionspapier der PEGIDA 19 Punkte*.

欧文文献

- Brubaker, R. (2017). Between nationalism and civilizationism: the European populist moment in comparative perspective. *Ethnic and Racial Studies*, 40(8), 1191-1226.
- Conze, V. (2005). *Das Europa der Deutschen: Ideen von Europa in Deutschland zwischen Reichstradition und Westbindung (1920-1970)*. Oldenbourg Wissenschaftsverlag.
- Conze, V. (2015). Facing the Future Backwards: 'Abendland' as an Anti-liberal Idea of Europe in Germany between the First World War and the 1960s. In D. Gosewinkel (Ed.), *Anti-liberal Europe: A Neglected Story of Europeanization* (1st ed., pp. 72-89). Berghahn Books.
- Cremer, T. (2023). *The Godless Crusade: Religion, Populism and Right-Wing Identity Politics in the West*. Cambridge University Press.
- De Genova, N. P. (2015). In the Land of the Setting Sun: Reflections on 'Islamization' and 'Patriotic Europeanism'. *Movements: Journal für kritische Migrations- und Grenzregimeforschung*, 1(2).
- de Wilde, P., Koopmans, R., Merkel, W., Strijbis, O., & Zürn, M. (Eds.) (2019). *The Struggle over Borders: Cosmopolitanism and Communitarianism*. Cambridge University Press.
- Dostal, J. M. (2015). The Pegida movement and German political culture: Is right-wing populism here to stay?. *The Political Quarterly*, 86(4), 523-531.
- Druxes, H., & Simpson, P. A. (2016). Pegida as a European Far-Right Populist Movement. *German Politics and Society*, 34(4), 1-16.
- Flowerdew, J., & Richardson, J. (Eds.). (2017). *The Routledge Handbook of Critical Discourse Studies* (1st ed.). Routledge.
- Forlenza, R. (2017). The politics of the Abendland: Christian democracy and the idea of Europe after the Second World War. *Contemporary European History*, 26(2), 261-286.
- Forlenza, R. (2018). 'Abendland in Christian hands': Religion and populism in contemporary European politics. In G. Fitz, J. Mackert, & B. Turner (Eds.), *Populism and the Crisis of Democracy: Volume 3: Migration, Gender and Religion* (1st ed., pp. 133-149). Routledge.
- Forlenza, R., & Turner, B. S. (2019). Das Abendland: The politics of Europe's religious borders. *Critical Research on Religion*, 7(1), 6-23.
- Halliday, F. (1988). The Iranian Revolution: Uneven Development and Religious Populism. In F. Halliday & H. Alavi (Eds.), *State and Ideology in the Middle East and Pakistan* (pp. 31-63). Palgrave.
- Havertz, R. (2021). *Radical Right Populism in Germany: AfD, Pegida, and the Identitarian Movement*. Routledge.
- Hien, J. & Wolkenstein, F. (2021). Where Does Europe End? Christian Democracy and the Expansion of Europe. *JCMS: Journal of Common Market Studies*, 59, 1623-1639.
- Hooghe, L., & Marks, G. (2009). A Postfunctionalist Theory of European Integration: From Permissive Consensus to Constraining Dissensus. *British Journal of Political Science*, 39(1), 1-23.
- Kaya, A. (2019). *Populism and Heritage in Europe: Lost in Diversity and Unity*. Routledge.
- Kaya, A., & Tecmen, A. (2019). Europe versus Islam?: Right-wing populist discourse and the construction of a civilizational identity. *The Review of Faith & International Affairs*, 17(1), 45-64.
- Koselleck, R. (1982). Begriffsgeschichte and social history. (K. Tribe, Trans.). *Economy and Society*, 11(4), 409-427. (Original work published 1972).
- Koselleck, R. (1998). Social History and Begriffsgeschichte. In I. Hampsher-Monk, K. Tilmans, & F. van Vree (Eds.), *History of*

- Concepts: Comparative Perspectives* (pp. 23-36). Amsterdam University Press.
- Koselleck, R. (2002). *The Practice of Conceptual History: Timing History, Spacing Concepts* (T. S. Presner et al., Trans.). Stanford University Press.
- Koselleck, R. (2004). *Futures Past: On the Semantics of Historical Time*. (K. Tribe, Trans.). Columbia University Press. (Original work published 1979).
- Koselleck, R. (2018). *Sediments of Time: On Possible Histories*. (S. Franzel & S.-L. Hoffmann, Trans. & Eds.). Stanford University Press. (Original work published 2000).
- Lewis, B. (2022). *Oswald Spengler and the politics of decline*. Berghahn Books.
- López-Marcos, M., & Martín, C. T. (2019). Europe: Décadence et élan. Images of the eternal return of Abendland. *Cogent Arts & Humanities*, 6(1).
- Marzouki, N., McDonnell, D., & Roy, O. (Eds.). (2016). *Saving the people: How populists hijack religion*. Oxford University Press.
- Reisigl, M., & Wodak, R. (2009). The Discourse-Historical Approach (DHA). In R. Wodak & M. Meyer (Eds.), *Methods of Critical Discourse Analysis* (2nd ed., pp. 87-121). Sage Publications.
- Rensmann, L. (2018). Radical Right-Wing Populists in Parliament: Examining the Alternative for Germany in European Context. *German Politics and Society*, 36(3), 41-73.
- Roy, O. (2019). *Is Europe Christian?*. Oxford University Press.
- Spengler, O. (1922). *Der Untergang des Abendlandes: Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte*. C.H. Beck. (Original work published 1918).
- Stübner, J. (2021). „Abendland“, „Lateinische Zivilisation“ oder „Zivilisation des Todes“: Zivilisationismus und rechte Untergangsvorstellungen in Polen, Deutschland und Österreich. *Zeitschrift für Ostmitteleuropa-Forschung*, 70(3), 399-426.
- Taggart, P., & Szczerbiak, A. (2002). *The party politics of euroscepticism in EU member and candidate states* (Version 1). University of Sussex.
- Taguieff, P.-A. (1995). Political Science Confronts Populism: From a Conceptual Mirage to a Real Problem. *Telos*, 103, 9-43.
- Vasilopoulou, S. (2011). European Integration and the Radical Right: Three Patterns of Opposition. *Government and Opposition*, 46(2), 223-244.
- Volk, S. (2022). Conceptualising Europe from the far right: The mobilisation of intellectual heritage in Germany. *Journal of European Studies*, 52(3-4), 238-254.
- Vorländer, H., Herold, M., & Schäler, S. (2016). *PEGIDA: Entwicklung, Zusammensetzung und Deutung einer Empörungsbewegung*. Springer VS.
- Weisskircher, M. & Berntzen, L. (2018). Remaining on the Streets. Anti-Islamic PEGIDA Mobilization and its Relationship to Far-right Party Politics. In M. Caiani & O. Císař (Eds.), *Radical Right Movement Parties in Europe* (1st ed., pp. 114-130). Routledge.
- Wodak, R. (2021). *The Politics of Fear: The Shameless Normalization of Far-Right Discourse* (2nd ed.). Sage Publications.
- Wodak, R., Mautner, G., & Reisigl, M. (2009). *Methods of critical discourse analysis*. Sage Publications.
- Yilmaz, I., & Morieson, N. (2022). Civilizational Populism: Definition, Literature, Theory, and Practice. *Religions*, 13(11), 1026.
- Yurin, A. N. (2020). Concepts West-Nation-Abendland in German sociopolitical discourse. *RSUH/RGGU Bulletin Series "Political Science. History. International Relations"*, (2), 94-107. (In Russ.)
- Yurin, A. N. (2024). On the Genealogy of the Concept of “Abendland” in the Programs of the CDU, CSU and AfD Political Parties. *ISTORIYA*, 15(10). (In Russ.)

和文文献

- 板橋拓己 (2016) 『黒いヨーロッパ：ドイツにおけるキリスト教保守派の「西洋」主義、1925～1965 年』吉田書店
- 稲葉瑛志 (2020) 「保守革命と黙示録 -- 「没落」の不安と「ライヒ」の勃興」『社会システム研究』第 23 号、pp. 1-21
- ヴァイス, フォルカー (2019) 『ドイツの新右翼』(長谷川晴生訳) 新泉社 (原著: Weiß, V. (2017). *Die autoritäre Revolte: Die Neue Rechte und der Untergang des Abendlandes*. Klett-Cotta.)
- ヴァイス, フォルカー (2020) 『エリートたちの反撃ードイツ新右翼の誕生と再生』(佐藤公紀訳) 新泉社 (原著: Weiß, V. (2011). *Deutschlands Neue Rechte. Angriff der Eliten - Von Spengler bis Sarrazin*. Ferdinand Schöningh.)
- ヴィーナー, アンツェ、デューズ, トマス編 (2010) 『ヨーロッパ統合の理論』(東野篤子訳) 勁草書房
- 遠藤乾編 (2024) 『ヨーロッパ統合史 [第 2 版]』名古屋大学出版会
- カーショール, イアン (2019) 『分断と統合への試練 ヨーロッパ史 1950-2017』(三浦元博訳) 白水社
- カミュ, ジャン=イヴ、ルブール, ニコラ (2023) 『ヨーロッパの極右』(南祐三監訳、木村高子訳) みすず書房
- 近藤正基 (2018) 「第 5 章「ドイツのための選択肢」と欧州懐疑主義」井上典之・吉井昌彦編『EU の揺らぎ』勁草書房、pp. 103-126
- 高橋進・石田徹編 (2016) 『「再国民化」に揺らぐヨーロッパ：新たなナショナリズムの隆盛と移民排斥のゆくえ』法律文化社
- ジャット, トニー (2008) 『ヨーロッパ戦後史 上 1945-1971』(森本醇訳、長部重康解説) みすず書房
- ジャット, トニー (2008) 『ヨーロッパ戦後史 下 1971-2005』(浅沼澄訳) みみず書房
- 山口定・高橋進編 (1998) 『ヨーロッパ新右翼』朝日選書

-
- (1) なお、Abendland 概念は孤立して機能するのではなく、『Volk (国民)』や『Identität (アイデンティティ)』といった隣接概念と『概念のネットワーク (network of semantic change)』を形成している(Koselleck, 2004, p. xv)。分析においては、これらの共起関係 (co-text) にも DHA の言語内的文脈 (Language-internal context) の観点から留意する (Reisigl & Wodak, 2009, p. 93)。
- (2) 連邦憲法擁護庁による監視下に置かれる極右民間団体 Institut für Staatspolitik (IfS) が発行した Staatspolitisches Handbuch シリーズに収録された語をオンラインで確認できる。 <https://staatspolitik.de/abendland/> (2025 年 12 月 16 日アクセス)
- (3) この「中欧」を中心とする地域主義的構想は、後にナチス・ドイツの生存圏 (Lebensraum) 構想において、より侵略的な形で悪用されることとなる。
- (4) 保守革命の思想家とナチズムとの距離感は一様ではなく、シュペングラーのようにナチスの人種論を「卑俗」と批判した者もいれば、積極的に協力した者も存在する。しかし、両者が「反リベラル・反民主主義」という基盤を共有していた点は否定できない。
- (5) 本研究の対象ではないが、このような概念の「反リベラル」な姿勢が EU 懐疑主義を構成していると捉えることは可能である。
- (6) 「Leitkultur (主流／主導文化)」は、元来、政治学者バッサム・ティビー (Bassam Tibi) が 1998 年に「ヨーロッパ的・民主的主導文化」として提唱した概念であり、世俗主義や人権、民主主義といった価値観の共有を指していた。しかし、2000 年に CDU のフリードリヒ・メルツがこの語を用いた際、移民が同化すべき「ドイツ固有の国民文化」という意味へと再定義された。AfD はこの概念をさらに排他的に解釈し、多文化主義を否定し、ドイツの伝統的・文化的優位性を主張するためのキーワードとして使用している (Rensmann, 2018, p. 53)。
- (7) 「Europa der Vaterländer (祖国ヨーロッパ／諸祖国のヨーロッパ)」は、元来フランスのシャルル・ド・ゴールが提唱した概念 (l'Europe des patries) に由来し、超国家的な統合体 (連邦) ではなく、主権国家間の緩やかな連合を理想とする構想を指す。AfD を含む現代の欧州右翼ポピュリストは、EU のブリュッセル官僚主導の統合を「主権の侵害」として批判する際、対案としてこのスローガンを好んで用いる。これは EU の解体ではなく、国民国家の主権を絶対視する形での「ヨーロッパ協力」の再定義を意味する。参考: <https://www.bpb.de/kurz-knapp/lexika/das-europalexikon/176853/europa-der-vaterlaender/> (2025 年 12 月 17 日アクセス)